

607
103



0057828000

3

0057828-000

607-103

次の戦争と我海軍

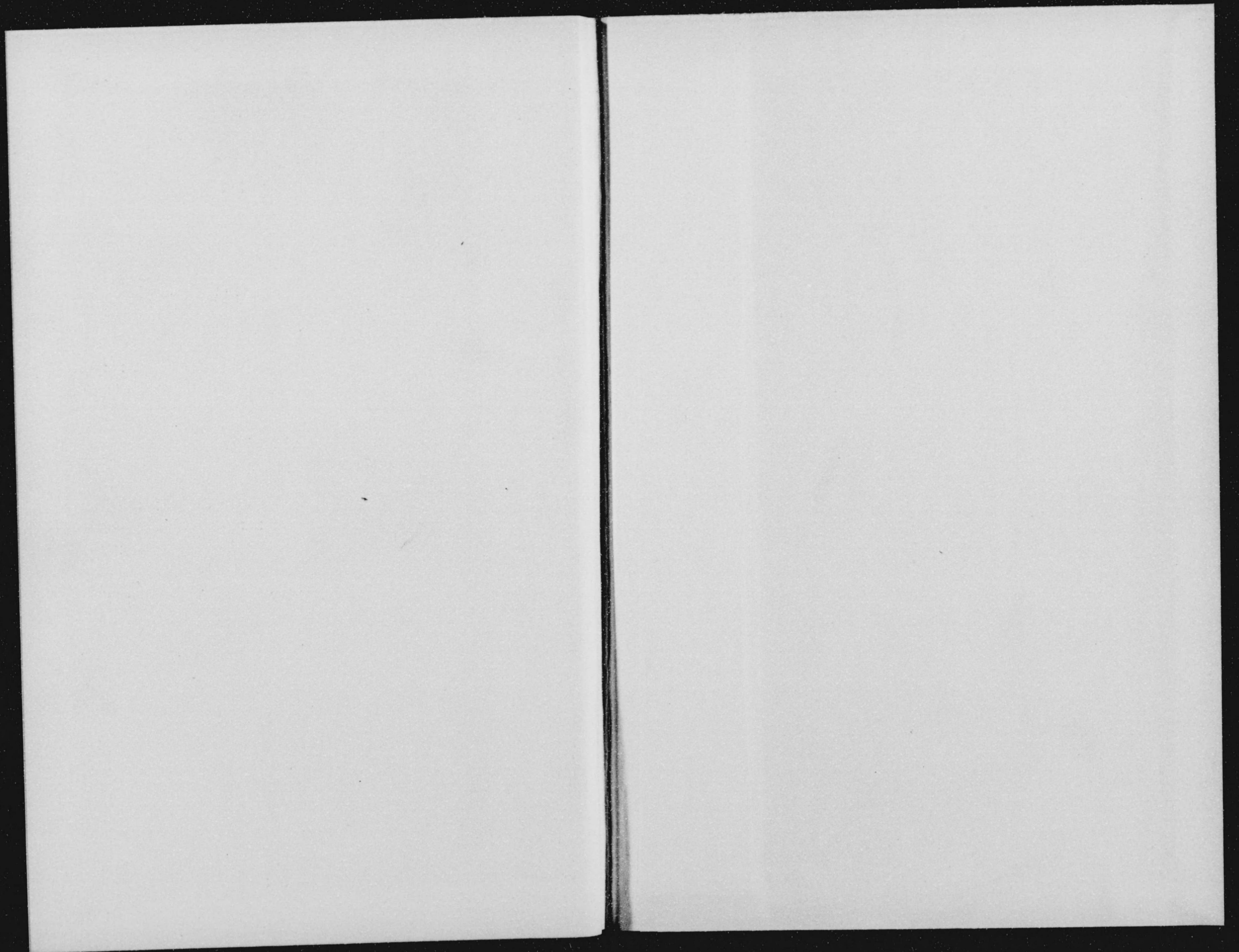
村田懋麿・著

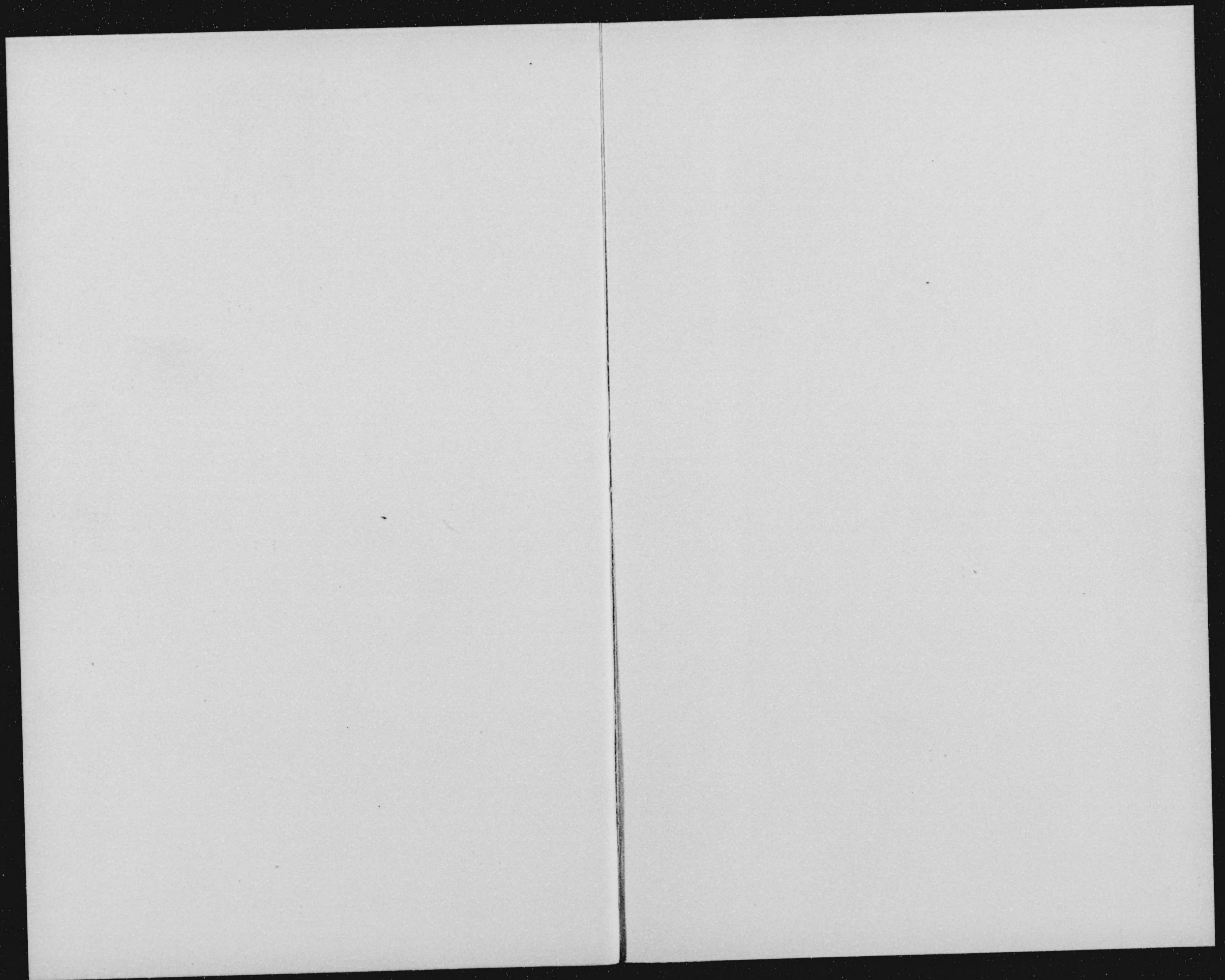
目白書院

昭和5

AJG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので





IT3A256

次 戦 争
と 我 海 軍



・院書白目・

607403

はしがき

三月ばかり閉籠つてこの小冊子を書いてゐるうち、いつか若葉の頃と
なつた。人間の世界にもそろそろ芽が吹いて来さうなものを、根っから
それらしい氣振りがさへ見えない。緊縮内閣にも大抵飽き飽きした。とい
つて、積極内閣になつたところで大した變り榮えもあるまい。一層のこ
と中間内閣か、それとも勞働内閣かと思つても見るが、さて、それらの
内閣にしてからが、果してどれほどの事を成し得るか、洵に心細い極み
である。一體これから先き先きをどう仕てゆく續りか知らぬが、お互に
精精日本丸を暗礁に乘上げぬやうに仕たいものではないか。

この小冊子はさうした考へから、著者が時事に感ずる所あつて、平素
懷抱する露見の一端を綴つたものに他ならない。お互が直面しつつある

我邦の行詰りの状態は、抑も何に原因するかを突止めて、必暹來の國難の性質から日米戦争を豫想しての海軍政策に涉り、大體の輪郭を明かにしたのがこの小冊子である。斯道の大家や通といはれる人達の間交つて、これを公にすることは何んとなくかう氣が引けるやうであるが、情實や因縁などに囚はれぬ自由の立場に在るのを強みとして、書くだけは書いて見た。老書生の一片耿耿の志を買つて貰へば結構である。

お互は海國民として一通り海軍常識を持合せたいものである。といつて、餘り技術上に涉つた細かいことまで強ひて知るにも及ぶまい。そこで、この小冊子には一艦一艇の機能などは成るべくこれを省略して、専ら政策上から觀た組織體としての任務を説明するだけに止めて置いた。尙國防とか海上権とかいふ日用の熟語やその他に就いて、全編を通じて著者一個の解釋を下した點が少くないが、獨斷は著者の生命である。世間に有觸れた意見を發表するなら、何も態々刊行の必要もないかと思ふ。

讀者から無遠慮の批判を受けて、啓發するところがあれば幸甚これに如くはなす。

昭和五年五月

村田懋磨

肉體は野蠻人なれ、頭腦は
 文明人なれ。日本魂を變へ。
 貴澤華美を棄てて質素簡朴を
 愛せよ。これ日本を偉大なら
 しむる所以、東洋に覇たらし
 むる所以也。

——小泉八雲

目次

戦争か革命か

この必運來の國難をいかに突破すべきか……………一—八三

生物哲學より戦争哲學へ……………一—

戦争の危險と平和の危險……………二—

國際聯盟と不戰條約の效果……………三—

個人主義對國家主義の立場……………四—

社會哲學より國防原理へ……………五—

昭和維新か日米戦争か……………六—

海軍の任務

海軍の任務は國防政策の遂行に在る……………八—

平和の維持は國防海軍の最高任務である……………九—

海上權力と海洋の自由は何を意味するか……………一〇—

戦争の手段は三者いづれを擇ぶべきか……………二二九

索敵と封鎖は同一の作戰目的を有する……………二三八

海戦は人智と機力を悉くした闘技である……………二五二

貿易破壊戦は劣勢海軍の腹癒せに止まる……………二八四

海權を伴はぬ大規模の入寇は望みがない……………二二五

艦隊はその根據地を以つて歩むのである……………二三五

艦隊の編制

艦隊編制には平時と戦時の別がある……………二二九

艦隊編制は艦型の均一を要求する……………二四三

艦隊編制はどうすれば可いか……………二四九

八八艦隊と八四艦隊はどんなものか……………二五四

(終)

戦争か革命か

生物哲學より戦争哲學へ……………一一二四

戦争の危険と平和の危険……………二五—二六

國際聯盟と不戦條約の効果……………三六—三〇

個人主義對國家主義の立場……………五二—五七

社會哲學より國防原理へ……………五七—七三

昭和維新か日米戦争か……………七三—八二

我々は東海の孤島なり。一旦
緩急あらば、陸に陸軍の備わ
りとも、坐ながら敵を受けて、
防禦の位置に立つ不利あり。
攻守共に海軍を擴張せざるべ
からず。

——大國肥後守



戦争か革命か

この必運來の國難をいかに突破すべきか

われわれは糧を求めると同時に心の渴きを感じる。それゆゑ、國家生活はひとり生存意志ばかりでなく、文化意志の支配をも受ける。いかなる民族も文化の促進者たるに適し、且無限の生活力を有すると確信して疑はぬことは理の當に然るべきところである。國家は成長し、發展し、進歩し、向上して劫初より未盡へと瞬時も休まざるべきが、その建前でなければならぬ。即ち國家の生活には断じて停止といふことなく、進歩か、退化か、二途その一あるのみである。さうして、いかなる民族も自ら退化を欲することなく、互

國家生活
は進歩か
退歩か
退歩の
途あり
であるか
か

に競ふて進歩の一途を辿らうとするときに、どうしてそこに生温い妥協生活が行はれ得よう。ケツスレルヤクロボトキンケツスレルヤクロボトキンの相互扶助論が所詮一片の空想に止まり、優勝劣敗の鐵則が矢張り千古の眞理として、肯定せらるべきことに何等の不審はない筈である。

優勝劣敗は畢竟弱肉強食に他ならない。詰まり優勝國は劣敗國を侵略することにより更に成長し、發展し、進歩し、さうして、より一層の向上を遂げるのである。これはいづれの國家も例外なく辿つて來た、極めて古い生活の方式である、と同時にまた新しい事實でもある。否、恐らくは過去現在未來を通じて、國家生活に適切な方式はこの以外に有り得ぬであらう。侵略には領土侵略 Territorial aggrandizement、もあれば、經濟侵略 Economical encroachment、もあり、また文化侵略 Cultural encroachment、もある。そのうち領土侵略は正義人道の觀念に背反するといふので、近來莫迦に評判が悪い。しかし、世界に國を成すものは數多く、而かもその國國がそれぞれ不斷の成長と、發展と、進歩と

領土侵略と經濟侵略
文化侵略と政治侵略
は昔は行はれなかつた

向上を遂げてゆかうといふのであるから、互に他を蠶食するより途がないことは明かである。人類の歴史は侵略の歴史である。民族の生存競争は、先づ生活の程度が低い未發の蠻地に向つてする、領土の蠶食競争を以つて着手せられた。領土蠶食といひ狀、同時に多少とも經濟侵略と文化侵略を加味したものであることは疑ひない。しかし、近代國家の資本組織は専ら經濟侵略の一點に集注する傾向を示めし、一方に於いて、文化侵略も亦これに對立して、思想宣傳の戰術により一新生面を開拓した觀がある。

露土亞は廣大無邊の疆土を掩有してゐる。多種多様の民族を包擁してゐる。さうして世界の文化と殆んど何等の交渉なしに、自から別箇の天地を成してゐる。露土亞は外國との戰爭にただの一度も勝利を獲たことはない。而かも今日のやうな膨脹を遂げてゐる。その歴史は全然征服の歴史ではなくして、四圍の民族との混血同化の歴史である。この點に於いては支那も亦同様である。西戎北狄東胡女真入つて中國に帝たらざるはなしで、四百餘州は幾度か

彼等の足跡に蹂躪せられながら、而かも、同化力に富む支那民族は、思想的にはその四夷をいつともなしに併呑して、これが易服改俗に成功し、さうして今日の膨脹を來たしたのである。文野といひ、華夷といふ文字の通り、支那人は自ら文華の中心を以つて居り、四夷をしてその徳教に惠浴せしめるのを理想とした。彼等の腦裏にはただ天下の觀念があるのみで、國家の觀念がなかつたことは固より理の當然である。國家の觀念がないといふのが妥當を缺くとすれば、思想上の國境を認めて、政治上の國境を認めてゐなかつたと修正しても可い。左も右くも、文化の普及するところ即ち彼等のいはゆる天下であつて、權力の範圍などは天から問題としてゐなかつたのである。文章國風を播くといふのがどこまでも彼等の理想であつて、干戈疆土を拓くことは決して彼等の得意でもなく、又その本旨でもなかつたのである。そこは蘇聯邦が世界革命を標榜して、専ら思想宣傳に努めてゐるのと何んとなく似通つてゐる。

領土侵略の
悪しき様
に罵る自
に國は自
合その手
らその手
しをその
本をその
しをその
るをその

文化侵略にせよ、何んにせよ、時代によつて自から特色があるのは免かれぬが、今日に始まつたことでないといふだけは確かである。それと同時に領土侵略も評判は悪いながら、全然廢れて了つたわけではない。現にその評判を悪くした本家本元の聯合國は、同盟國の本土とその植民地をそれぞれ分割領有してゐる。それは或は戦勝の分前であるから當然の權利といふかも知れぬが、むかしから仕來りの領土侵略と別段變つたことはないのは事實であるから、その強辯は結局成立たない。侵略が評判ほどの悪事で極力排斥せなければならぬものなら、戦勝の分前と否とに拘はらず、たとへ譲らうといはれども立派に斷つて然るべきものを、英佛白伊揃ひも揃つて勝手に頂戴に及んで、知らぬ面で澄まし込んでゐる。それだけなら未だしも、人の國を蠶食するのは善くない、平和自由平等の觀念に恃る、以後斷じて罷成らぬとはどの口で言へた義理か。矛盾とすれば此上ない矛盾、撞着とすればいかにも撞着に違ひないが、この世の中はすべてさうした矛盾撞着の鉢合せであるから、

それを一一答立てた分には際限がない。人の國を蠶食するのは善くないといつて、國と國の對立關係に於いてそれ以外に生存競争の方式がないのであるから、勢ひ己むを得まい。人間が生物であるからは、死活の問題は所詮是非善惡を超越した、第一義的の問題でなければならぬ。生の執着と活きんとする努力の前には、弱肉強食は結局免かれ難い自然の歸趨である。

想へ、われわれは日日の糧をどこからどうして攝るか。最近、支那の四川の山奥で発見せられた、二百五十歳とかの現實の仙人の直話によると、別に霧を吸つて生きてゐたわけではなく、矢張り百草の食分けが不老不死の秘傳であることが判つた。仙人ですらさうとすれば、俗人が有らゆる植物を常菜とするのは當然といへばそれまでであるが、植物とても生物であるからは、よしや赤い血は出ぬにしろ、さう矢鱈と芽を摘まれたり、葉を爬かかれたり、花をむしられたり、實をもがれたり、根扱ぎにせられたりしては堪つたものではない。しかし人間が食はずとはゐられぬ以上、それは尋常事として姫

御前まで別に怪しまうともせないである。動物となると、有繫に殺生といつて、誰もが自分から手を下して絞めたり、潰したり、刺したりするのを、可厭がるだけは幾らかしをらしく思へぬでもないが、さて食ふ段には鳥獸魚介何んでも御座れで、宗教家までが人一倍の好物とあつて平氣でゐられるのが不思議。嘗に食料とするばかりではない。趣味とか、娛樂とか、智識の普及とか、學術の研究とか、調査の必要とか、その他種種雑多な名目の下に、萬物の靈長たる當然の特權でもあるかのやうに、生物の屠殺は世界の免許となつてゐる。開闢このかた直接と間接を問はず、人類の生存が動植物に掛けた迷惑は、どれほどか知れたものではない。しかし、いづれも己むを得ぬ必要といふのを唯一の理由として、人類は有らゆる生物を犠牲に供じて生きてゆく。否、さうせなくては生きてゆかれぬのである。同じ筆法を移して同胞間の共食ひをもあつさり片付けて了うのは、チト物足らぬやうな感じもするし、また何んとなくかう氣が咎めてならぬやうでもあるが、左りとて、人間も畢

侵略は已むを得ぬ必要あり、
必す共にあり、
必ずしも得ぬ必要あり、
もあらず。

竟生物である限りは、矢張り自然淘汰の支配を免かれ得ぬことをいかんともする由もない。

侵略は國家の生存上、已むを得ぬ必要である、と同時に人類の進化上、寧ろ缺ぐことを得ぬ必要でもある。もし侵略が絶対に行はれなかつたとしたなら、その結果は抑もどうであらう。世界の大半は依然として南洋や、濠洲や太平洋や、亞弗利加の内地に棲むやうな蕃族の爲に占有せられて、現代の文明に到達し得たかどうか、誰しも烏渡保證し兼ねるに違ひない。二十世紀の今日を十八世紀以前と同一情況の下に、論斷する謂はれがないことは知れ切つてゐる。しかし、いかに交通機關の發達と一般利益の増進が相俟つて、有らゆる民族の生活と文化を漸次同一の平準に引揚げつつあるとはいへ、その間、自から優劣高低の差を生ずるのは勢ひ避け難く、優劣高低の差を生ずればこそ、平準を保つべく互に競ふて、より一層の向上を遂げ得られる進化の原則に至つては、何等の變りもない道理である。天水に噴へる。雨となつて

降り低きに流れるのもその性であれば、雲となつて飛んで高きに揚がるのも亦その性である。かくて高きより低きに低きより高きに循環して盡きる時なく、須臾だも休むことがないからこそ、天水は清められるのである。大氣に噴へる。氣壓の高低を生じて交々平均を得ようとして、絶えず風を起して四方へ吹き廻はしてゐればこそ、大氣は爽かなのである。時化が怖ろしいといつて死水無風の狀態は想像するだに慄乎とする。國際の關係もちやうどその通りである。民族間に侵略といふことが絶対に行はれぬとすれば、世界は現狀のまま釘付けとなつて人類の進化は全く停止し、再び闇黒の時代に逆轉する他はない。侵略の評判が近來急に悪くなつたのは、大戰後の復舊に汲汲として發展を劃する餘裕がない、民族が現狀維持を必要とする打算上宣傳し出した所爲である。さうして過去に於いて相當の膨脹を遂げて、最早その望みが全く絶えた民族が双手を擧げてこれに和同し、尙人道國の假面の下に實は法外の大野心を挟む民族や、世界革命の指導により思想上の羅馬帝國を打建

てんと夢みる民族が、これを利用して他の新進民族の發展を抑へ、その間に乘じて自ら事を成さんとして、この大勢を誘致したものに過ぎぬのである。

○

それゆゑ、この大勢は所詮永續の見込はなく、又その永續を希望すべき何等の理由もない。われわれは侵略が一切行はれぬ世界を想像することすら到底困難であるばかりか、その結果が人類文化の一大矛盾を藏する以上、斷じて歓迎すべき事柄でもないと思ふ。われわれは侵略の肯定を敢へてする。侵略の肯定が同時に戦争の是認であることはいふまでもない。優勝劣敗の眞理は、可也古い時代から支那の哲人によつて道破せられたところであるが、ダーウキンが出てこれを科學的に説明することに成功した。この進化の法則を一層複雑な組織と廣大な規模に於いて、現示するものは戦争に他ならない。戦争は人類の生存競争の方式である。人類として生物であるからは、所詮進化

の法則に洩れよう道理はない。ただ人類間の生存競争が他の生物間の生存競争と違つた點は、後者が本能的衝動に基くに反して、前者が意識的努力に頼るといふだけのことである。言換へれば、生存に對する執着と生存せんとする努力の、意識的合理的有意義且眞面目なものは、ひとりこれを人類間に於いて看るを得るのみである。随つて、民族間の優劣は常に生存上の適否の問題であるばかりでなく、亦實に主張上の曲直の問題である。優れるが故に活きるものは勝てるが故に正しい。われわれは活きんが爲に優れ、正しからんが爲に勝たなくてはならない。これは戦争に頗る重大なる意義を賦與するものである。われわれがどうにかして他の民族を凌駕せねば休まじ、とする生物の本能以外に、勇往邁進危を蹈みて怖れず、險を冒かして顧みぬ、牢固たる信念を持するものは畢竟これが爲である。ダーウキンニズムに對して相互扶助論を支持する一部思想家がある。相互扶助論は結局妥協生活の主張である。しかし、妥協生活は、元來自他の生活の基礎に動搖を及ぼさぬ範圍に於

戦争は文
化と生存
の優劣を
決定する
べき方式
である。

いて始めて行はるべき事柄であつて、決して自然淘汰の法則を左右するに足るものではない。人類の生活を支配する生存意志と文化意志は、勿論主観的であるから、これを妥協生活によつて決定せうとしても、それは事實不能であり、また強ひて決定せうとすれば、低級ながらも情弱なる民族が、單にその頭數が多い強味だけで肉體精神共に健全な民族を壓倒し去り、その極み遂に人類の退歩を招くの結果を見るであらう。われわれが戦争を回避せぬ理由は、第一、戦争がかかる不幸から同胞を救済し得べき創造力を有する點に在る。戦争の價値を批判するには、先づ生物學の見地から、戦争が生存の適否と文化の優劣を決定すべき有利の方式として、人類進化の過程上、必要缺ぐを得ぬ所以を理解せなければならぬ。

侵略に戦争は附物である。侵略戦争と一口に言つて、人道平和自由論者からは一文の値打ちもないやうに無闇と扱卸されてゐる。「夫兵者凶器也。戰者惡德也。」とは支那の思想家の金言として毎度引用せられるところである。戦争

が生、呪咀者として、富の破壊者として、又個人の享樂の防碍者として、物質にのみ活きるものに取つて、迷惑至極もないことは今もむかしも變りはない。残忍酷薄暴虐無道の極みを悉くして憚らぬものは戦争である。誰れの頭腦も實物教育でみつしり叩込まれてゐるから、かういふ印象を容易に去り得ぬのは一應も再應も無理のないところである。それをかれこれいふのではない。ただ、しかし、何事にも利害が伴ふのは免かれぬ數であるから、さうした害毒の方面ばかりを指摘して、戦争を極力回避せなければならぬ、と主張する偏見だけは是非共これを棄てて欲しいものと思ふ。貴族僧侶士豪武士などいふ階級が、單に家門の榮辱や勢權の争奪の爲に討伐を事とした時代でさへ、簡易素朴禮節克己沒我堅忍努力剛毅勇敢などいふ、有らゆる人間の美德が槍林彈雨の裡に瀕養せられ、鼓吹せられ、さうして陶冶せられたことを念へば、その時代の闘伎化せられた戦争とは固より同日の談でない、現代國家の威力行爲を目して、偏にこれを野蠻視し、罪惡視するのは果してその當を

戦争の價値を批判するには、生物學上及道德上以外、更に政治上の見地に立ち、表面に正義を装ひ内實術策を弄してひとり自ら利益を壟斷せうとする、富強國壓制の桎梏から同胞を解放する爲め、名譽の武器を執つて曲直を決するものは、われわれの崇高な義務であることを牢記せなければならぬ。ところで大戦後平和風は凄まじい勢ひを以つて世界を吹掃くつてゐる。もし平和を無競争の謂ひであるとすれば、遺憾ながら人類間に於けるさうした状態を想像する由もない。絶對の平和は佛者のいはゆる寂滅である。涅槃である。極樂である。それは未來に求むべきで現世に求むべきではない。靈魂に求むべきで肉體に求むべきではない。精神に求むべきで物質に求むべきではない。一般に戦争と對比せられる平和は、恐らくさういふ意味に解すべきではあるまい。そこで、國際間に於ける無緊張の状態を指すものと假定する。それで列國がお互に生存と文化の理想を實現し得られるなら洵に結構であるが、それは畢竟一片の希望に止まるばかりでなく、その當然將來すべき結果はわれ

戦争は人類の救済を目的とするが、政治的救済の價値がある。

われの期待を裏切るものである。何故かなら、平和の維持久しきに彌れば、國民は無難に狂れて享樂を是れ事とし、文恬武熙の弊に陥り、氣魄は體力と共に銷磨し、果弱の極み遂に種族の絶滅を見るであらうからである。敵國外患なければ國遂に亡ぶるのである。平和の美名はいかにも憧憬すべきであるが、平和の實現は穴勝ち渴仰すべきではない。われわれは生存上の調節法として、道德上の清淨法として、將た又政治上の救済法として、決して戦争を回避することなく、有らゆる手段を盡くしてこれに従事するのが、人類文化を促進する所以であると主張するものである。

戦争是認から出發して戦争禮讓に到着したが、これに對しては勿論有力なる駁論がある。しかし、新人と呼ばれる世の主義者思想家達から、どんなに舊思想扱ひを受けようと、反動思想と極付けられようと、われわれは平素の主張通りどこまでも一本調子に進んでゆく。われわれは自分自身を單なる肉塊に過ぎぬものとはどうあつても考へられない。一生を成るだけ愉快に暮ら

して、苦勞のないやうに仕たい情に變りはないが、左りとて、物質の追求肉慾の満足そのものを、唯一の目的とするまでに理に於いて徹底し得られない。平和と自由の女神に抱かれて、歡樂無碍の境涯を送るのを人生の理想とすれば、國家の存在は嗚ぞかし迷惑至極でもあらうが、われわれは一種の保險會社のやうな積りで、我儘勝手や放縱自墮落を利かして貰ふ氣になれない。人間として走屍行肉の譏りはどこまでも受けたくないものである。われわれが生をこの世に稟けて家庭に成長し、社會に活動し、國家に貢献する最終の目的は、決して賣名や營利や享樂の爲ではない。實に黙我より人我へ、人我より神我へ、と歩一步向上の階梯を辿つて圓滿の性格を渾成せんが爲である。ところで、個人主義はこの目的に添はない。われわれは入つては家庭の人となり、出でては社會の一員となり、集團生活の構成分子としてその組織内に吸収せられつつ、活動することにより次第にその徳器を成就するを得るのであつて、國家生活はこの目的を達成すべき最高組織でなければならぬ。教

育勸語はわれわれの信條である。それは人倫の大道を聖訓せられたものであるが、一方に於いて國家の範疇を垂示せられた經典でもあると拜察する。威其徳を一にせんことを庶幾ふ——國家の最高任務はこの結語のうちに總括せられてゐる。國家は安寧と秩序と福祉を保障し、國民をして各その物質と精神の充足を得せしむべく、最善の努力を拂つて終始一貫發展の道を講ぜなくてはならぬ、と同時に國民は國家がその發展の前途に横たはる、障礙に對して奮起と緊張と犠牲を要求するに際し、欣然としてこれに應ずる覺悟がなければならぬのである。

われわれが世の新人達と全然その立脚點を異にするところは嘗に叙上に止まらない。戰爭の危険よりも寧ろ平和の危険さを一層怖れるからである。戰爭の性質は、一般に想像せられるやうに生命と財産に對するその慘害でもなければ、破壊と殺戮を逞しうするその残忍でもなく、實に一大賭博とも見らるべきその危険さに在る。いづれの邦を問はず、戦ひに臨んではひたすら勝

戦争の危険
は、大賭博
の點に
ない他
ならぬ

たんことを期し、自ら敗れるのを望む道理はないが、勝つべくして敗れ、敗るべくして勝つは定數 Fatal threat である。勝敗の公算 Probability は現在の對勢と情況の推移に照らして、略これを豫斷し得られぬでもない。しかしその定數に至つては、所詮人力の克くこれを確知し得る限りではなく、ただ、天の配劑神の辯理に任かすのみである。われわれは戰史を繕いて勝敗の迹を討ね、その由つて來たる所以を歸納し、事前に於いて事後の成績を判斷する資料に供するが、それは適勝敗の公算を豫斷する参考に止まつてゐて、何等その定數を確知すべき標準とするに足るものではない。戦争といふ大賭博ほど勝敗の定數の不確實なことは他にはあるまい。戦争は賽ころを振るやうなものである。丁と出るか半と出るかは振つて見なければ皆目當りが付かぬのである。そればかりではない。勝利の獲得は勿論道徳上及精神上の權威の結果に歸すべきであつて、勝利の保障たるべき道徳上及精神上の權威は、これに由つて心靈上の試練に堪えべき民族の繁榮を促進し、より一層高度の文化を將來す

る所以でなければならぬ筈である。もしさうでなく、單に物質上及肉體上の追求にばかり執着する民族が、これらの利益を壟斷してその無限の福祉に惠浴した日には、世界は何等の氣魄もなき腐敗の分子によつて充滿し、再び暗黒の時代に退化して了う他はなからう。純理から言へば、われわれは當然さうした假説の下に論旨を進めてゆかなくてはならない。ところで、實際は穴勝ちさうもないから不思議である。戦争が勝敗のいかに拘はらず、輒もすれば國家組織の要素を破壊し、その民族生活の基礎を危うすることは掩ひ難い。ただ、大體に於いて、勝者が比較的敗者よりも容易に戦争の創痕より恢復し、一層良好の生活状態に到達し得べきことを、歴史はわれわれに教へるといふくらゐなものである。洵に心細い道理であるが、事實はその通りである。勝敗の定數が不確實な上に、その結果まで不公平とあつても、尙懲りずまにその危険を冒かして大賭博を打たなくてはならぬのであるか。さういふ疑問が起るのは一應尤も千萬であるが、そこになるとわれわれは古英雄の心

個人も永劫
も生命は
家の生に
の得るに
ていかに
るか。

事に共鳴して、一種の人生觀に立脚するものであることを告白するの他はない。榮枯といひ盛衰といふも、所詮滅亡に歸するは一つである。悠悠たる天地に較べれば轉瞬も亦暫ならぬのである。しかし、千歳不磨の功績をその間に留めるものは、その國没するともその業は没せず、その民盡くるともその名は盡きぬのである。希臘羅馬は大鵬のやうに去つた。その滅亡は遠き古への事であるが、その盛名とその大業とは今に傳へて猶在りし日と異るところはない。恐らくは人の種のこの世に絶えせぬ限り、永へに傳へて忘られる秋はないであらう。功德志業の天下後世に垂るるに足るものありとすれば、その人不幸にして中道に斃れるとも、猶不朽の生命を稟くるに均しいといはなくてはならない。一國の文華煥然として天日の遍照するやうに四海を光被し、舉世概ねその化に浴し、人類永くその恵に頼るとすれば、その命數よしや明日に盡きるとも、亦何んの悔ゆるところがあらう。個人も國家も、運命の審判の前には別に變りはないのである。個人に百年の齒がないと齊しく、國家に

も萬歳の壽はない。ただ、生命の外に超脱して獻身奉公の誠を效すことにより、個人は永劫の境涯を享ける。國家も亦その通りである。世界人類の進歩向上の爲にその存亡を賭して悔いぬものは、天壤と窮りなき唯一無二の途でなければならぬ。天壽は命窮達は分である。人は逆めその適處を知る由もなく、又その死期を察する術もない。ただ挺身事に當るに全力を以つてし、斃れて後已む決心があつてこそ始めてその分を究め、その命に應ずることが得られるのである。そこまで徹底すると、人は最早人ではなくして、神彼と俱に在ますのであつて、人我より神我の域に達したものである。國とても勿論これと異るところはない。運命の決定を歲月の推移に委ねることは、個人の最大罪惡であり、同時に國家の最大罪惡である。それゆゑ、人生にも理想の境地がありとすれば、これに達する途は他でもない。無爲に非らずして奮闘であり、偷安に非らずして冒險であり、平和に非らずして戦争であるのみである。さうはいふものの、安寧と福社と平和は人類の渴仰して休まぬと

ころである。しかし、われわれは遺憾ながら、人生そのものが一大賭博であつて、これを肉體と物質と現世の上に追求するには、餘り變轉常なくして寂滅時あり、匆忙として晨に夕を保し難いことを指摘せぬわけにはゆかぬのである。さすれば、無爲偷安を以つて人生の能事了るとするものは、小心翼翼嘗つて榮辱を念はず、恪謹してその現狀に甘んずるの賢明なるに如くはなからう。左もない限り、果斷決行機に臨んで疑はず、變に處して惑はぬ覺悟が欲しいものである。かくいへばとて、われわれは自暴自棄ただ徒らに猪突を敢へてするを可しとするものではない。事の直前に至るまでの深思熟慮が肝腎なことは、事後に於ける果斷決行が大切であるのと同様である。勝敗は神の司るところであるから、人は從容としてその審判を受けるまでである。思案は賽を振るまでの話、一たびルビコンを渡つて了へば、躊躇は絶対に禁物ある。戦争は賭博であるからとて、斷じて無謀の舉に出てはならぬし、卑怯の態は尙更嚴かに戒めなくてはならぬのである。

事前の
に於て
深く思
考し
る
事
に
於
て
果
斷
の
必
要
を
決
め
る

○

戦争の危機は周わく知れ渡つたことであるが、平和の危険さとなると、誰もが左程まで氣に留めぬかしてこれまで餘り八かましく言はれてゐない。出血を見るだけで失神するほど外傷を恐はがりながら、さて内症は目に注かぬままに兎角養生を怠り勝ちとなり、それが因で次第に重つて到頭一命を隕す。これが世の常である。戦争と平和の危険に對する人間の感受性もちやうどそんなものか。軍神は怖ろしいが、目に見えぬ微菌を撒き散らす平和の女神は恐くないといふのはいかにも不思議な心理である。戦争の危険は左ることながら、古來いかなる民族も兵燹が直接の原因となつて、忽然として滅亡した例は寡聞にして餘り耳にしたことはない。羅馬は一日にして成らずといふが、同時に一日にして没したわけではないのである。羅馬はゴール人の侵略によりその榮華の誇りを棄てたには相違ないが、これより先き、上下擧つて肉慾

のボムベイの廢墟を
訪づれば平
和の危険を
和の危険を
あしき得ら
うる確知

の奴隷となり、この勁敵を邀へてこれを驅逐するに堪えぬまでに、腐敗墮落を來たしてゐたことである。われわれはその根本の原因に目を掩ふて、單にその最後の日を劃する、動機をのみ重視する弊を去らなくてはならない。今日ボムベイの廢墟を訪づれるものは、そこに羅馬滅亡の真相をまさまざと睹るを得るであらう。それは取りも直さず有らゆる民族没落の史實を、如是に物語るものでなければならぬ。人間の高尚なる品性が、暖衣飽食の裡に陶冶せられるものなら何も言ふことはない。われわれはそれこそ鼓腹擊壤して、偏に平穩無事を祝福して休まぬであらう。ところで、何分にも凡夫の悲しさ、平穩無事は可いとして、只様無爲安逸の生活に慣れるまま、いつとはなしに物質萬能の思想に囚はれて、ひたすら享樂の蹤を追ひつつ奢侈の風に染み、道義の觀念は全く地を拂つて黄金の魅力のみひとり幅を利かし、人間が物格視せられるやうになるので困まつたものである。そこに平和の危険が孕まれてゐる。その徴候は繁殖力が極めて旺盛でありながら、驚くべき深刻なる潜

平和裡に
於ける人
文明の機
問に他な
らぬ

伏性に富んでゐるだけに、餘り際立つて現はれぬ點に在る。そこで、誰しも感染を豫覺せぬうちに忽ち麻酔の症状を呈して神氣恍惚となり、而かも患者自身はどこまでも中毒とは思つてゐないから、所詮恢復の見込はなく、却つて傳染の媒介となつて一層その流行を促進する道理である。それは疑ひもなく一種の文明病に他ならない。さうして、資本主義の現代國家に於いて、その最も好適の培養基を看出し、頗る急速度の猖獗振りを見せてゐる。資本主義は物質文化の酵母である。そこには生活が愈益機械的となる一方であつて、いはゆる實業家の眼には、人間はリベット一つスウキツチ一つ、ほどの値打ちもないものとしか、映らぬ傾嚮の殊に顯著なるものがある。この傾嚮は明かに精神文化の危機を醸すものである。これをその成行のままに放任しておいた日には、家庭の神聖は破壊せられ、社會の風教は紊亂せられ、國家の目的は茲に消滅する、由由しき大事を齎らすものといはなければならぬ。そこで、われわれは生活の調節法として、人心の轉換法として、また

精神文化の発展を
 外に求め、
 国内の人心を
 奮起させる

道義の維持法として性と職業と階級の別なく、舉國一致の精神動員によりその危機を突破する爲め、時として避け難い戦争の必要を認めるものである。戦争は個人の生命に對して非常の犠牲を拂はしめ、その財産に對して深甚の打撃を與へるばかりでなく、動もすれば國家生活の基礎に危殆を及ぼす虞れなしとせぬが、しかし、一たび勝利を博すれば殆んど例外なく多大の経済的利益に浴し得て、戦前に比してより一層の振興を見るに至ることは疑ひない。それゆゑ、現代國家はいづれもその経済組織を維持する爲め、資本の投下と事業の発展に必要な安全を保障し、尙進んでこれに必要な物資の供給と市場の開拓に従事し、苟しくもこれを妨碍せんとするものあれば、國運を賭して排除することを辭せぬのである。かくして資本家には計劃を、労働者には職業を、さうして一般民衆には希望と食糧を與へ、上下協力ひたすら對外発展に活動して、生活の倦怠と疲勞を來たすことなからしめ、競争國に對する萬一の警戒より絶えず人心の緊張を持し、有事の日に方り欣然起つて國難

に殉ずるやうに仕向けるのは經世の要道であり、大政治家の當に努むべき最高任務でなくてはならない。現代國家がその精神文化の危機を突破すべき唯一の救済方法は、これを差置いて他には絶對に有り得ぬのである。戦争は何人に論なく國民にはすべて一様の奮起と献身の戮力を強要し、同一の目的に對し協同團結して、甲乙なき節制と忍耐を以つて邁進する軍國の大業であつて、國民の平素の教養と鍛鍊は遺憾なくその間に發揮せらるべく、平和の虚飾はその假面を剝落して、人格は茲に始めてその天賦に従つて各應分の成就を遂げ得るのである。古來具眼の政治家が苟しくも世道の頹廢・人心の萎靡を招く徴候ある際、これを未然に救済する爲め期せずしてこの非常の手段に出たことは別に異とするに足らぬであらう。さういふ意味に於ける戦争は決して罪惡と看做さるべきではなく、却つて極力これを回避すること、社稷に對する正當の義務を怠るものとして、卑怯未練且不純の譏りを免かれ得ぬのである。

商工立本
植民開國
は近代の
大勢であ
る。

現代の戦争はすべて経済的原因よりする侵略的戦争であることはいふまでもない。商工立本植民開國は世界の趨勢であつた。植民は土地を要する。商工そのものは穴勝ちさうもないが、さて原料の供給をいづかに仰ぎ、製品の販路をいづかに求むべきかの實際問題となつて來ると、これ亦畢竟土地を要することは争へない。國家が一たび勃興の氣運に向ふと、人口の増殖と産業の發達は、駭駭として殆んど底止するところを知らぬ概がある。その結果として、國民が勞力過剰生計逼迫の弊を避け、食糧の獨立と物資の自給の途を講じ、後世子孫をして永くその恩澤に浴せしめる所以の土地は、或る時期に於いて頗る廣大の面積を必要とするに至ることは明かである。列強が互に相競ふて版圖の擴張を念としたことは勢ひ止むを得ぬところであつた。この大勢は前世紀の中葉ごろまでは、一時流行した勢力の均衡と獅子の分前に洩れ

移民は素
民は本國
の利益と
ならぬ。

た發端が未だ残つてゐた關係から、どうやら緩和せられたやうであつたが、その後幾度か變遷を経て、最早過剰民戶の排口を文化の程度が低い、未發の曠土に求める望みがなくなつて了ふと、人口の洪水は遂に接壤の國家を覆沒せねば休まぬ状態を呈して來た。過剰人口は穴勝ち植民政策に俟たずとも、移民政策によつて處分せられるのではないかといふであらう。いかにもそれは一案に違ひない。しかし、移民は結局棄民である。一國の働き盛りの青年を海外に轉住せしめて、他國の曠野を開墾し、その耕地を豊饒にし、その生産を増加させるだけのことで、何等本國の利益とはならず、却つてそれだけ損失を招く勘定であつて、到底移民の送金くらゐなこと、埋合せがつく道理のものではない。そこで、獨逸などは米大陸に向つて一時毎年二十萬人からの移民を送つてゐたが、後にはこれを中止して専ら波蘭を中心とする東部の露國內に集注する政策を採つた。否、昔に獨逸のみには限らない。いづれの國家も、その過剰民は能ふだけこれを本國と近接した地域に移植して、方方に

逸散せしめぬやうな政策を採るのが、自然の數であるといはなければならぬ。産業政策にしても亦その通りである。物資の供給を受くべき地域を獲得するにも、製品の販賣をなすべき市場を開拓するにも、また關稅の障壁を突破して工場を海外に進出せしめるにも、成るべくこれを本國と餘り隔絶せぬ位置に選定するのが、一般の原則となつてゐる。かくて、そこに經濟的範圍が擴張せられ、政治的勢力が扶植せられて、本國を核心とする一連不斷の國防圈を構成し、外交的活動によつてこれを支持し、軍事的背景がこれを後援して、民族は次第に膨脹を遂げてゆく。これが現代國家の侵略經路である。

この侵略經路の指導原理は、帝國主義 Imperialism と世界政策 World-policy に他ならない。世界政策は國際政策 International policy、といふべきが妥當であるが、爰には通俗に做つておく。物理学の教えるところに據れば、遠心力と求心力は互に相反する二つの作用であるかに看えて、實はいづれも一定の方向に加速度を以つて動く地球引力の作用に過ぎない。しかし、われわれは説明

經濟侵略の指導原理と帝國主義の政策とを世界主として

の便宜上、これを二つの力として別別に取扱つてゐる。帝國主義と世界政策の關係もちやうどその通りで、いづれも國家意志の作用である點に變りはないが、二様の形式として觀察しても敢へて差支ないのである。國家は世界政策の網を擴げて膨脹を遂げるが、これをそのままに放置すれば、その勢力範圍は遠心的にその母國より次第に離れてゆく傾嚮を免かれぬから、そこは帝國主義の網で程よくこれを求心的に母國に引絞つてゆく必要がある。何事にも骨子はあるが、取別けこの網の引絞り加減と網の擴げ方の骨子は面倒で、まかり間違へば一國の浮沈にも關はる。その骨子は取りも直さず國防政策の要領でなければならぬ。しかし、前にも述べた通り、國家の建前が不斷の膨脹に在るとき、放射狀に擴大せられてゆく二つの核心を有する國防圈は、いつかは接觸を免かれぬ道理であつて、かくして、現代國家の侵略戰爭は、その相互の勢力範圍を劃する國防圈に縁ふて行はれるのである。かうなると、大地は廣いやうで決して廣くなく、人寰徒らに事の滋きを見るのみである。

その不安定なる國際状態は、今尙依然として毫も變りはない。一口に原因といふが、戦争の原因にはその起り得べき所依 Condition、もあれば、その起らざるを得ぬ所由 *Proba* もあり、又その起らなくてはならぬ所因 *Causa* もある。所依は普通遠因とか條件とかいはれてゐる。叙上は侵略戦争の起り得べき遠因若しくは條件である。次に社會的紛争に對しては、道徳に權威あり、法律に制裁あり、主權これを支持して、大事を醸すに至らぬ先に克くこれを防壓し得るのである。しがし、國際的紛争に對しては、これを緩和し、これを戒禁し、これに干渉し得べき何等の絶對意志はなく、武力解決の一途のみが緊切且決定的手段として存するのである。國家の緩急に際して、ただ自己の鐵腕が自己の主張を貫徹し、自己の運命を開拓し得るのみで、これより以外に信頼するものはないといふことは、取りも直さず戦争が起らざるを得ぬ所由である。所由は普通の場合には大抵省略せられてゐる。尙戦争が起らなくてはならぬ所因となると、これを一一することは到底困難である

が、概説すれば、係争問題に對する或る一國の行動か、又は或る事變の發生かに基くものとして可からう。それは一般に動機とか近因とかいはれてゐる。これを要するに、戦争は、不斷に安定を缺く國家間の關係が、或る懸案の解決を動機として、俄然緊張を告げ、互に兵力に訴へてその政策を支持するに至つて起るのである。國家がいかに危機に瀕しても、最後の處決の他がなければ起らず。局面がいかに緊急に迫まつても、動機の發生を見なければ起らず。問題がいかに重大を極めても、情勢の誘致がないとすれば起らぬのである。言換へれば、所依と所由と所因の三者が具さに備はつてこそ、戦争は爰に始めて起り得るのである。しかし、この三者さへ備はれば必ず起るかといふと、穴勝ちさうとも限らない。戦争を單なる國際間の出來事とすれば格別、係争國の政略と密接の交渉を有する民族的行爲であるから、自然現象のやうに純然たる因果の關係ばかりで推斷する道理にはゆかない。即ち戦争は自然原因以外、更に政略原因をも考慮のうちに加へなくてはならぬのであ



る。戦争の避け難い情勢と、避け得ぬ機運は、國家の意志を動かして大事を決するに至らしめ、又逆に國家の意志はさうした情勢を誘致し、さうした機運を促進せしめることは、歴史がわれわれに教えるところである。和戦の局が機微の間に動くを察すれば、因果の法則と國家の意志が、交互に玄妙の働きを及ぼすことを見るであらう。戦争が他の手段を以つてする、政略の繼續であることは疑ふ餘地がない、と同時に一方に於いて、普通の出来事と同様に因果の法則の下に支配せられることも亦決して閑却するを得ぬのである。戦争が起るのは偶然のやうで偶然でなく、突然のやうで突然でなく、漠然のやうで漠然でなく、必らずやそこに所依と所由と所因があり、さうして國家の意志の交渉が絡まつてゐるのである。

戦争は何んの兆候もなく俄然襲來する暴風見たいなもので、いつ起るか到底豫測することが出来ぬ、といふ人もある。係争國がいつどんな行動に出るか、又係争問題に對してどんな事變がいつどう發生するか、それは勿論的確

戦争には
必ず先
政の先
示がなく
ない。

に知れよう道理はない。ただ、周到の注意と徹底した觀察を怠らず、國際の消息に通曉することによつて、纔に危機の逼迫を直前に看取するを得るのみである。しかし、それにしても、係争國が果して非常手段に出るかどうかは、最後の一瞬までは遽に断定は仕難い。何故かなら、干戈の事は勝敗のいかに拘はらず、重大の責任を負はなくてはならぬので、係争國は牢乎不拔の決心と、萬に遺漏なき成算と、公明天地に愧ぢぬ目的がなければ、さう滅太矢鱈と起されるものでもなし、同時にまた一國の自由獨立榮譽並に文化の使命に對する民族意志は、第三者が机上の検討によつて、到底商量し得べき限りでないからである。和戦の局がいづれに決すべきかの断定に苦しむのは、畢竟この双方の事情があるからである。しかし、戦争は詰まり平時に行はれる外交の、他の形式を取つたものに過ぎぬから、所詮何等の兆候もなく突然起るものとはいはれない。戦争には必らずや政策の先示があるべき道理である。戦争が單純に因果の關係ばかりで律せられぬことは、いかにもその勃發を豫

測し難いやうにも思へぬではないが、他面に於いて國家の意志の支配を受け
 る點からいへば、却つて聞知し得べき端緒を有するとも見られぬでもない。
 それゆゑ、戦争の動機となる或る事變の發生は素よりの確に知りやうなく、
 又開戦の時期と名分の撰擇は、外間の想像以上に緊切の問題に屬するには違
 ひないが、能く情勢の推移を達観して萬一に備へ、能く機運の趨嚮を洞察し
 て非常に處する道を誤まることがなければ、穴勝ちその勃發を豫測し得られ
 ぬにも限るまい。それは一に牒報機關の整備に俟たなければならぬことであ
 る、と共に局に國政の變理に當るものの聰明と先見に負ふところ多い、とい
 はなければならぬ。

○

これまでは國際の規約を履行さす適當の機關がない爲め、戦争の不幸を見
 たわけであるが、今日は事情が丸切り一變したから、最うさうした心配はな

國家に國際
 機關が超國
 盟がないの

からう。眞面目かどうか知れぬが、こんなことを口にするものもある。さう
 いふ人達は國際聯盟や不戰條約を餘程買被つてゐるものらしい。國際聯盟は
 戦争を法律違反として、法律の絶対施行によりこれを防壓せんとする、参加
 諸國の法律意志の結合に他ならない。この結合はその規約を締結した當時の
 情況に變化を見ぬ、期間だけは兎も角も繼續するであらうが、俗にいふ合せ
 物は何んとやらの嘘の通り、情況が變ればいつ放れ放れとならぬ限りもない。
 先づ歐洲諸國が大戦の瘡痍から恢復し切らぬうちはどうやら繼續するかも知
 れぬ、といふくらゐな極めて頼りのないものである。縦しんば永久に存続す
 るものとしてからが、戦争の防壓が可能であるとの斷定は容易に承認せられ
 ない。何故かなら、國際聯盟は超國家機關の名はあつてもその實がなく、個
 人と個人の間にはける暴力の行使に對し、國家が最高意志としてこれを防壓
 するやうなわけにゆかぬからである。國際の紛争が純然たる司法關係だけに
 止まれば兎に角、實力問題となるとこれを審理すべき法律の制定しやうはな

い。そこで、國際聯盟は結局事件の起る度毎に世界の輿論に訴へて、常識で裁判してゆかうといふ寸法であるが、生憎と世界の輿論は勢ひ區區に涉つて何等統一はないのであるから、それを標準とするのは抑も無理な注文であつて、随つて實情に適した而かも公平な裁判は到底期せられぬ道理である。それは先づ我慢するとしても、その仲裁裁判に不服を徇へる紛争國をどう制裁したものか、そこが國際聯盟の肝腎な點であるが、丸切り骨抜きも同様になつてゐる。成るほど聯盟規約第十六條には、聯盟諸國の紛争國に對する制裁手段として、經濟斷交や實力脅威の權利が規定してある。聯盟諸國は過般の大戦に味を占めた經驗から、大抵の國は獨逸のやうに世界中から袋叩きにされた日には叶はぬ、と觀念して不服をいふまいと思ふか知れぬが、その嚇しが利く國と利かぬ國がある。さうして、その嚇しが利かぬからといつて、矢鱈と手を下す段には、その結果は由つて以つて防壓せんとするところのものを、反つて自から誘發する矛盾に陥らざるを得ぬのである。その矛盾は社會

あかく嚇し
るの國と
が利の
が利の

秩序の代りに國際平和を以つて置換へ、法律意志の代りに世界輿論を以つて置換へ、個人の腕力沙汰を國家が取締ると同じ様に、國家の組織的暴行をも抑付けようとする無理から來たもので、畢竟國際意志の結合と由つて生ずる強制威力を餘り過大に見積る所爲である。國際聯盟の可能は有らゆる強國の参加と、参加諸國が請合つてその調停なり勸解なり仲裁なりに服従する、といふ保障を前提とするのであるが、遺憾ながらこの二つの條件は共に缺けてゐる。即ち米獨露の三大國を除外せなくてはならなかつたことは、明かにその効果の半ば以上を没却し去つたもので、お負けに制裁手段まで不備とあつては天から型なしである。

國際聯盟は既定の事實を基礎として成立してゐる。それは結局世界を現状のまま釘付けにするやうなものである。前途の短い老人國や早老國には定めし都合が好からうが、これから伸びようとする青年國としては迷惑至極なもの話で、そのお招待は好い加減に御免蒙りたい、と思ふのも滿更無理はある

老人國がや
早老國が
電車極先
客を極先
まを極先
堪らなば

まい。先に席を取つたのを好い機會として、大きな面をして場を塞いでゐたとすればどうか。譲つて呉れなければ割込んでゆくのが當然である。それの後から來ながら割込むのが悪いといつて、何も袋叩きにして可い道理はなからう。老人國なり早老國なりが、いつまで國際聯盟を牛耳つてゐる積りか知れぬが、この電車や汽車の先客氣取りで、制裁の標準を勝手に極めてかかるのは何んとしても潜越の沙汰である。國際聯盟が膺懲戦争の權利を認めてゐるのは、國家が最上權力として、個人に制裁を加へると同様の標準を以つて擬せん、とする觀念の錯誤に出たものである。侵略の目的を以つて先づ攻撃を取へてするのはどうして不法であり、これが對抗の必要から勢ひ防衛に出るのはどうして正當であるか。平等關係の個人と個人の間には、どちらが侵害を取へてし、どちらが防衛に出たか。またその侵害の事實が果して必迫避け難いものであつたか、防衛の程度が果して緊急止むを得ぬものであつたか。これらを審理するのに實際上困難を感じる場合がないでもないが、

暴力を抑
へるのに
は暴力を
以つてす
る他に適
當の手段
がない。

國家は絶對意志としてこれを決裁して斷じて惑ふことはない。しかし、對等關係の國家と國家が、互に非常手段を講ずるの已むなきに至れるを主張し、確く執つて相下らぬときに、何者か能くその是非を辨じ、その曲直を別つことを得よう。交譲の望み全く絶えて危機目睫の間に迫まる際、これが決裁を列國の斡旋に委ねて、手を空しうして敵の來攻を待つ國家があらうとは、いかにしても思へぬのである。暴力を仰へるのには暴力を以つてする他に適當の手段がないことは、遺憾ながら事實であるからいかんとも詮方はない。紙片の上に保障せられた何物が、果して暴力の前に權威があるか。一切の規約が一切空文に歸して、暴力のみがひとりその無限の脅威と戦慄すべき破壊を逞しうしたことは、過般の大戦に如くものはない。聯盟の共助を頼んで國防の義務を懈れば、殷鑑遠からず、白耳義の二の舞を踏むやうになるのは疑ひを容れぬのである。

國際聯盟はカントの社會契約説から出發してゐる。カント逝いて茲に百二

法によつて相當の制裁を加へることにならう。しかし、それはこの條約の直接の效果とは何等の關係もない。殊に、この條約はその成立までの英佛米間の内交渉に於いて、國家の自衛權の行使を妨げず、而かも自衛權の解釋に就いては、各國は獨自の立場よりする自由を認められてゐるのであるから、愈以つて心細い極みである。強ひて言へば、國際聯盟が法律的に戰爭の正當なる權利を認めてゐるに對して、不戰條約は人間の良心に訴へて暴力の行使を回避せしめよう、とする點に道德的價値があるとでも解すべきであらうが、それほどなら別段條約で約束するまでもないことである。こんな條約ならどの國も文句なく盲判を捺す筈で、それだけにほんの氣休めになるくらゐしか、何んの役にも立たぬといふ結論になるのである。

かく言へばとて、われわれは決していかなる場合にも戰爭の道義的價値を肯定し、有らゆる口實の下に暴力の無制限認容を主張するものではない。否、寧ろ兵火の慘禍を或る程度に制限せんとする趣旨に於いては、人道論者に對

正義の
人類の
特權
ある
戦争
の
種類

して滿腔の敬意を拂ふに躊躇せぬものである。ただ、これを超國家機關の制裁に待つことを無用とし、當然これを國家の自制に委ねべきものである、といふ點に於いて不幸にして見解を異にするだけのことである。國家の最高任務が民族の文化使命の遂行にありとすれば、國家自體も亦能く道德の準繩を守つて濫にその範疇を超えることなく、干戈の鬭争は、ただこれを民族の興廢に關する重大問題か、その使命の危機に瀕する緊急の場合かに止むべきことはいふまでもない。正義の戰爭とか、人道の戰爭とか、自由の戰爭とかいふのはかかる場合を指すのである。暴力の行使を叙上の範圍に制限するのは、是非の辨別を解する人類のみがひとり有する特權である。それゆゑ、凡そ事變の勃發に際しては、専ら交讓協調を旨として圓滿の解決を告げたが可いか、それとも飽くまで非常手段に訴へて自己の主張を貫く他はないか、事態の輕重大小、條理の正邪曲直乃至結果の利害得失を、篤と冷靜に打算して禍を未萌に爰き、悔を千歳に貽さぬやうにするのは國家の當に務むべき道である。

これを要するに、國家の存立と發展の前には、たとへいかなる代償を拂つても、決して高價に過ぎるとはいはれぬのである。その場合に於いて、戦争が敗者の上にも案外の幸運を齎らすものであることは、特に留目に値ひするのである。獨逸は大戦の敗者であつたが、その空前の難局に處して示めした献身殉國並に一致團結の精神は、他日必らずや大に酬ひられる時があるに違ひなく、決して徒事には畢るまいと思はれる。凡そ勝敗のいかに拘はらず、社稷の存亡に際して流がした國民の碧血は、世世子孫の心肝に滲いで必らずや復活の機会に逢ふべく、よしや種族盡き廟祀絶えてその機会に逢ふことがないにもせよ、他の剛健進取の種族の神靈に感應して同様の奮起と生氣を見るとすれば、その國民は永へに酬ひられたものといはなくてはならない。われわれが豫測し得べき時期に於いて、所要の成果を收めべき戰術的公算が絶無の場合とても、國難に殉ずる覺悟がなければならぬとする論據はそこである。獨逸民族の崛起は世界大戦の勃發を餘儀なくせしめた。さうして、不安

五〇

進んで他を制する
か退いて他を待つか
か退いて他を待つか

定なる國際の状態は今日も尙依然として、戦前と毫も變つたところはない。進んで他を制するか、退いて制を他に待つか、われわれの擇ぶべき途は、ただ、この二つ一つを出ぬのである。

○
國家主義の立場から論斷すれば、當然かかる歸結に到達するのであるが、世間にはわれわれとは全然反對の立場に在る人達も數多く、われわれと其人達との間には、立場が違へばかうも違ふものか、と思ふほどの主張の開きがある。以下その人達の口吻を真似る。

人格の機械化は資本主義の必然の結果である。多少の差こそあれ、現代國家に共通の傾向である。資本主義を肯定しながら、かかる傾向に對して憤慨するのは自家撞着であつて、それを一種の文明病として排撃する資格は全然ない。支配階級は人間の物格化に對して、今更らしく躍起となつて連りと騒立てるが、全體何を標準として腐敗墮落呼ばはりをするのか。資本國家の法

人格の機械化の必然の結果
資本主義の必然の結果
資本主義の必然の結果

律・道德・宗教・教育といつたものは、もともと例外なくすべて、支配階級が被支配階級から経済的搾取を行ふのに都合が好いやうに出来上つてゐるものであつて、勿論人類生活の規範とするに足るものではない。それゆゑ、これに唯一の標準としてそれに背反する行爲を指して腐敗墮落と目するわけにはゆかぬのである。一步を譲つて、よしんばそれが腐敗墮落であるにもせよ、それは取りも直さず支配階級の中毒症状ともいふべきもので、被支配階級とは何等の關係もない事柄である。物質萬能の世界は抑も誰が將來したのか。産れ落ちるとなり筆より他に重い物を、持った覚えがない人達の間でこそ安逸とか、享樂とか、奢侈とかいふやうなことが問題となるであらうが、日夜營營としてただこれ汗と膏——否、血と涙の社會奉仕を強ひられてゐながら、一碗の飯一杯の汁だに有り付けぬ、どん底生活を續けてゆく被搾取社會には、肉慾の奴隷・我の亡者などは絶對に有り得ぬのである。黄金がその絶大の魅力を選しうして、人間の眞價が認められぬ世の中などと、どこを押せばさう

地理的影響
資本主義
の脅威

いふ音が出る、それは資本組織を支持する支配階級が、勝手氣儘に作出したものでないか。

それにも拘はらず、彼等の或者はそれを一に地理的環境の影響と見て、他の劣勢なる民族・國家への經濟侵略によつてその物質生活を擴充し、又或者はそれを他の優勢ある資本國家の脅威と見て故意にその民族意識を挑發し、彼等のいはゆる精神文化の危機を切掛けようと焦つてゐる、いづれにしても人心を外に轉換することによりその搾取生活を維持してゆかう、といふブルジョア根性に至つては何等變りはないのであつて、東西を通じて殆んど一致してゐるところの、支配階級の常套手段に他ならない。この人心轉換の秘策は、國民全體が宛ながら共同の祖先から繁殖して來た、一大家族でもあるかのやうに歴史を修飾することにより、至極尤もらしく見せ掛けていつも巧くその目的を達してゐる。民族とか國家とかいふ觀念なり感情なりは、これを他の民族や國家と對立せしめるときに、最もその高潮に達し、最もその熾烈を

征服被征
服の關係
は支配階級
と被支配階級
の關係として
存する。

極める。そこで、支配階級がその民族の團結と奮起を強要する場合には、いつも他の優勢なる民族の脅威を受けてゐることを誇張して宣傳するのを夢にも忘れない。國民の注意を對外問題に轉換するやうに仕向けることにより、國內に於ける社會鬭争の緩和を圖らうとするのは資本國家の慣用政策である。優勢民族の間に混血同化が行はれて、終に一大種族 *big* を形作るやうになるにもせよ、當初はいづれも部落 *Tribe* より部族 *Tribes* へ部族より民族 *Nation* へと、弱肉強食の呑噬を反覆してゆくうちに次第に大を成すに至つた、發達の経路ばかりはいかにしても掩ひ難いのであつて、随つて、その間に於ける征服被征服の關係は、支配被支配の階級として今尙存續せられてゐることは、いづれの民族國家にも看られる現象でなければならぬ。政治上に於ける支配被支配階級の對立は、同時に經濟上に於ける搾取被搾取階級の對立である。國內に於いて征服の目的を遂げた支配階級が、やがてその巨臂を海外に伸ばして、その飽くなき搾取慾を満足せしめねば休まぬのは理の見易きところで

ある。現代國家の戰爭は搾取階級の戰爭である。被支配階級の何等關知する限りではない。敵は外に在るのではなくて内に在るのである、われわれは先づ國內に於ける搾取階級の桎梏から同胞を解放するを手初めとし、尙進んでその戦線を擴張して同様の境遇に沈淪する海外の同胞をも、共同の敵手から解放せなくてはならない。戰爭の絶滅が可能でありとすれば、かくして階級差別を國家生活から取除いた後でなくては、それは所詮期待し得らるべくもないであらう。

戰爭は戰爭によつて絶滅し得られるものでは斷じてない。何故かなら、それは取りも直さず戰爭の繼續であつて、どこまでも盡きせぬ環に終るからである。戰爭の絶滅は社會進化の道程に非常の衝激を與へる、或る顯勢變化 *dynamic-change* の發生を必要とする。現在の社會は階級的不安等の不平等状態に在る。これをそのままに放置して恒久平和の實現を望むのは、足場を固めずに梯子を登るやうなものである。搾取階級相互の間にこそ感情の衝突もあり、

戰爭の絶滅は顯勢變化の必要とする。

利害の錯綜もあれ。プロレタリアットの世界には、そこに爪の垢ほどの反感も、疾視も、宿怨も、遺恨もない。國境と種族の別を論ぜず、互に手を取合つて仲睦まじく進化の道程を攀ぢ得るものは、労働の神聖に活きる裸一貫の無産者同志でなければならぬ。かくして人類はいつかは高遠の理想に到達し得るであらう。それゆゑ、われわれは和衷協調とか、共存同榮とか、その他様様な巧い口車に丸められて、うっかり人心轉換の奥の手に乗り、搾取階級のお先棒を承はつて侵略戦争といふ、同胞の共食ひを演じてはならぬのである。

爰には社會主義の主張の一端を紹介するのが趣旨であるから、これに對する批判は一切差控へるが、世間にはさうした主張に共鳴する人達が決して少くない、といふことはわれわれの篤と考慮せなければならぬところである。その主張に現はれた思想が一たび家庭や、學校や、軍隊に侵入したとすれば、果してどうなるか、われわれはこれを想像するだに肌粟を生ずるを禁じ得

國家の退
嬰によつ
て平和の
維持を餘
儀なくせ
ざる場
合の影響

ぬであらう。ところで、國家が退嬰によつて平和の維持を餘儀なくせられる場合を假定すると、その經濟界の被むる打撃は、戦争によつて受ける損害よりも却つて多大であつて、而かもその及ぼす影響は、ひとりかかる思想を一層悪化せしむるのみに止まらず、延ひていかなる不祥事の激發を見るに至るやも測り知られぬのである。何故かなら、國家の退嬰は直ちに國際に於ける政治的勢力の失墜となり、外交的活動の停止となり、經濟的範圍の縮小となり、民族の發展は茲に全く阻害せられて、人心の萎靡を來たすはいふまでもなく、貿易は衰退し、産業は疲弊し、就職難と生活苦は都鄙を通じて益深刻を加へ、社會問題のみ徒らに紛糾を極めるやうになることは、必然の數であるからである。

○

前に述べた通り、國家の建前は不斷の影眼に在るとはいへ、時に消長あり、

勢に盛衰あるは免かれぬところであるから、時勢により國家の膨脹が自から停頓の状態を呈することは有り得べきである。しかし、それはどこまでも客觀的にさうあるといふに過ぎぬのであつて、主觀的には國家自體はあくまでもその政略目標を民族の發展に置いて全力を擧げてこれに突進し、須臾だも休まぬのが本旨でなければならぬ。俗に消極政策とか積極政策とかいふが、國家として消極政策に出ることは到底考へ得られぬのである。萬一政府當局が退嬰を自認して消極政策に出るとすれば、それは幻覺か錯覺かに基くもので、所詮正氣の沙汰とは受取られない。われわれは停頓状態に於ける國際政策を指して現状維持 *Maintenance of the status quo.* と名づけるが、現状維持は決してかかる意味の消極政策の謂ひではないのである。今日の國際状態は、概して言へば、これが指導的勢力たる英語民族の現状維持を基準として、爾餘の民族が獨逸の慘憺たる失敗に鑑み、進んで現状打破を敢行する氣概がなく、一族に協調を事としてゐるので、どうやら當面の和平が維持せられてゆくやうに

國際の現
狀は英語
民族の現
狀維持を
基準とし
てゐる。

見える。しかし、かかる國際の現状は到底いつまで永續する理由もなく、又われわれとして決してその永續の希望もない。われわれが名づけて現状維持といひ、また現状打破といふのは、國際に於ける領土的關係乃至政治的勢力關係限りのことであつて、經濟的範圍關係を含まぬ意味に解せらるべきである。最上の防禦は攻撃に在る、といふ戰略の原則を國防政策にまで適用して、國境線の位置が地形上防禦に適せぬときは、これを後退せしめるよりも寧ろ前進せしめるのが自然であるとし、又は出口を海洋に求めんとする希望を單なる理由として、帝政露士亞のやうに侵略戰爭を遠慮會釋なく遂行する國家は、最早どこにも見當らぬことはいふまでもなからう。さうして、他方に於いて國際聯盟が兎も角も成立してゐる以上、さう矢鱈滅法と領土の侵略や政治的勢力の扶植が出来よう道理もないから、それは論外として、經濟的範圍の關係となると、戦前と戦後の別なく、凡そ現代國家はいづれも血眼となつてこれが擴張を念とせぬはない。否、戦後は戦

平和的發展の美名に
展下の侵略に
の均下は
が行はるれ

前に比べて、領土乃至政治的勢力の關係が一層面倒となつて來てからといふものは、列國が互に競ふてこの一事に努力し出したのは、理の當に然るべきところといはなければならぬ。世人はかかる趨勢に對し一般にこれを人類進化の象徴として、寧ろ樂觀的態度であるやうであるが、それは平和的發展の美名に盡感せられて、現代戰爭の原因を究めぬからである。列國がそれぞれ政治的乃至軍事的背景を去り、同一線上に立並んで經濟的競争を仕よう、といふのは一應道理ある主張のやうに聞える。しかし、經濟的競争の行はれるところには、外交的活動が随つてこれに伴ひ、外交的活動が行はれるからは、支援的背景が必らずそこに備はることは、止むを得ぬ勢であるから、たとへ當初列國が赤裸となつて均しく發足して無手の競争をするにもせよ、やがて再び以前のやうな角逐の状態に復歸すべきは、見え透いた事柄といはなければならぬ。それゆゑ、經濟的競争は平和的發展に藉口するにもせよ、勢ひ終に武斷的解決を必要とするやうになるのは疑ひない。英語民族はその

英語民族の
既得の利益
は位置の安
固する利益

用語が普及してゐるだけ、それだけ爾餘の民族よりも多大の便宜を有するのを奇貨として、平和と自由と平等の思想をわれわれの間に宣傳して、到らざるなく盡さざるはない。われわれは素より平等を欲し、自由を欲し、平和を欲する。しかし、それは決して英語民族の欲する平和を欲し、自由を欲し、平等を欲するわけではない。不利顯皇國はその新舊世界に跨る老大の版圖を擁して、日没を知らずと傲語してゐる。今は聊か衰運を辿つてゐるとはいへ、凡そ物資として供給に事を缺ぐ憂なく、國民はこれが不足を告げる虞れはない。また北米合衆國はその國內に於いてすら、未發の沃野が別に一國を成すだけの餘地を残してゐる。それゆゑ、その無主の天然物の開發と大企業の經營に人力の寧ろ乏しきを感じるとも、決してその多きに過ぎる憂はなく、而かもその文化の促進に適してゐる。さうして、更に將來の發展を劃せんとなら、中南米の山河は近く脚下に潤けてゐる。パンアメリカニズムの運動が能くこれを聯ねるの日がありとすれば、成吉思汗の大帝國を以つてしても到底

これに比ぐべくもあるまい。英語民族が穴勝ち領土乃至政治的勢力の擴張を
焦慮せずとも、現状維持によつてその既得の位置の安固を期するのを、却つ
て利益とするくらゐであるのは左もあるべきことである。しかし、それであ
るからといつて、爾餘の民族まで一樣に律し去らうとするのは、チト勝手が
過ぎはせまいか。政治的競争は侵略的野心を藏する、と解せられるから戦争
誘發の危険がある。經濟的競争はさうではない。領土保全は國際の平和を門
戸解放はその自由を、機會均等はその平等を保障する所以である。かくして
一切の政治的背景を去り、各國同列に立つて何等拘束なき經濟的競争に従ふ
のが正道である。彼等はいかう主張する。それは烏渡理屈のやうに聞えるが、
實は彼等の利便とするところによつて、爾餘の民族を控制する遁辭に過ぎな
い。世界の大戰は露獨の軍閥國家を擧して、その威力を英米の資本國家の上
に累加せしめた。資本國家の脅威は、その兵力より寧ろ黄金の偉大なる魔
力に在る。名を平和的發展に假りて、實は劣勢民族の膏血を搾取らうとする、

國家の危機は家
族の存続を争
ひ、内訌を争
ひ、革命の端
を開く。

その飽くことなき經濟侵略に在る。何んの平等何んの自由さうして何んの平
和がそこに有り得よう。われわれは政治的競争に於いていかなる勁敵をも怖
れることがあつてはならぬ、と同時に經濟的競争に於いても亦固より列強と
伍して、一步たりとも譲ることがあつてはならない。
かく言へば、對手國との間斷なき經濟的競争が白熱の状態となり、結局争
鬪戦の惹起を見ることを避け得られぬから、危険であると難するであらう。
いかにもそれに違ひない。しかし、われわれは民族の發展の前には戦争の危
険をも冒かすを、敢へて意としてはならぬのである。左もなくて、假りにも
戦争の危険に留えて屈辱を忍んでまで退嬰に安んずれば、對手國の經濟的脅
威は益加はつて國民の生活を壓迫し、社會問題の紛糾より延ひて政變の頻發
となり、その極み遂に革命を免かれぬことを覺悟せなくてはなるまい。國家
の不斷の膨脹は戦争の危機を孕み、民族が對外發展の望みを失へば、内訌の
揚句革命の端を開くのは必至の勢である。戦争は毎に安定を缺く國際に於け

國際政治の動向
と其の關係
の點を論ずる

る、互に相背馳する利害の衝突を原因として起り、革命は不平等の社會に於ける、互に相矛盾する主張の確執によつて生ずる。戦争か、革命か、われわれは抑もそのいづれを擇ばんとするか。

いふまでもなく時勢には推移があり、環境には變化を免かれぬ。その環境の變化に善處しその時勢の推移に順應して、民族生存の目的を達成するのが國防政策の主眼である。國家の組織はさういふ仕組になつてゐる筈であり、又さういふやうに仕向けることは治世の要道でなければならぬ。それゆゑ、能く四圍の狀況に鑑み國際の機運を察し、緩急時に應じ進止變に處して誤まることなきを期するのは、政治家の當に努むべき任務であつて、苟しくも時勢に逆行し環境を藐視して、平地に波瀾を捲起し國民をして直ちに禍亂の巷に投ぜしめるやうな、冒險を敢へてすることは素よりこれを避けなくてはな

國際政治の動向
と其の關係
の點を論ずる

らぬのである、といつて、情況と機運の支配の儘に放任して更に民族の發展を劃することなく、ひたすら追従糊合を旨として退嬰屈辱の弊に墮するものが、時勢に順應し環境に善處する所以では斷じてない。要はその變化と推移めいかに拘はらず、毎に先制主動の位置に立ちて機運を利導し情況を支應しつつ、その間自から國力の涵養と民度の増進を圖り、大成を將來に期するに在るであらう。その目的は内に在つては統治政策、外に對しては國際政策の、圓滑なる運用により達成せられなくてはならない。

世人は國際場裏に於いて餘り強硬の態度に出過ぎると、徒らに對手國の感情を損じて事端を繁くするばかりであるとして、極力これを回避し専ら協調外交を謳歌してゐるやうである。外交政策は畢竟妥協政策であるから、互讓協調の精神か、共通利益の増進か、但しは利益交換の方法かによつて、能ふだけ圓滿の解決を告げるやうに指導するのがいかにも常道であらう。事毎に強硬の態度を取つてあくまでその主張を枉げず、斷じて一步も退かぬなどい

いかなる努力を拂ふも、所詮局面を轉回する術なきに至るは必定である。平素時日の遷延裡に只様成行きに任かして置きながら、さて愈の段となつてこれを最後の處決に待たうとするのは冒險でもあり、又不利も甚だしい。

戦争に攻勢が必要であるのは、主として守勢を取る側に對して機先を制することにより、終始渝ることなき軒昂たる意氣を以つて豫定の計劃通り、確乎たる目標に向つて邁進し得らるべき精神的利益があるからである。その反對に、たとひ一時の機宜から守勢を取るにもせよ、その場合は敵の意圖に追従するを餘儀なくせられる結果、勢ひ氣力の銷磨を來たして捉へ得る機会をすら空しく逸し、退嬰自屈して惨敗を招くに至る弊害を免かれない。この原則は外交の方面にも、外なく適用し得られる。言換へれば、先制主動は外交の秘訣でなければならぬ。先制主動とは、自國が主動の位置に立つて對手の機先を制する謂ひである。和戰の決をその掌裡に握つて、大勢を利導すべき外交の骨子は、これを差置いて他には絶對に有り得ぬのである。それゆゑ

先制主動は外交の秘訣である。

軍人が事あれかしと難を辨へたがるのも素より變めた話ではないが、外交家が無難を能として禍を後日に貽すのは一層戒むべきことである。軍人によしや禍心ありとしても、禍因がなければ事端を滋からしめる由もないが、禍因が既に伏在するからは、たとひ禍心なしとしても、所詮いつかは事變の發生を避け得られぬのであり、さうして、その禍因を腫物のやうに扱つて、一切手を觸れずにそつとしておくことから自然に腫されるのである。我邦の俗は兎角不言實行の癖があるやうであるが、國際場裏にはその弊は何より禁物である。權利が明白で少しも曖昧でないとすれば、飽くまでこれを主張して結局列國の承認を得るやうにすべき筈のものを、言ひたいことも碌に言はず、何事にも遠慮氣象が先に立つて、どこまで折れて出るか判らぬやうな弱腰でゐながら、さて情況が切迫してどうにもならぬとなつた段に、それまでとは打つて變つて急に強く出る、といふことは餘り面白くない。我邦が好戰國の譏りを受けるのは、或はさうした點に在るのではなからうか。好戰國の譏り

外交の弱はなる
利の誘致は争
るを誘致す

は當らざるも甚だしいが、平生無口なものほどいざとなると手出しが速いから怖ろしい、といはんほどの意味に解すれば、穴勝ち反省の餘地がないでもないやうな気持ちもする。外交は成るべく平和手段により國利民福を増進する所以であるが、同時にその見込みがない場合に於いて、早晚避け難き戦争を能ふだけ有効に實施し得べき状況を利導する所以でもある。世人は強硬なる外交が戦争を激發する危険ばかりを重視して、その實軟弱なる外交が却つて不利の戦争を誘致する危険を察知せぬのはどうしたものか。そればかりではない。一方に二重外交の名の下に自己の責任を回避しよう、とするものがあるかと思へば、また他方には戦争を外交の失敗を一氣に取返へす、總決算のやうな積りでゐるものもある、といふのが我邦の現状である。それでは國際政策の圓滑なる運用が到底期せられよう道理はない。

國家が時勢に順應し環境に善處して、存立の目的を達成するには、終始一貫の政略方針に基く外交と軍事の、相互の活動に須たなくてはならぬのであ

七〇

外交の内失
敗及ぼす
影に及ぼす
大影響の重

るが、苟しくもその間に緊密の連鎖を欠いで圓滑の運用が期し得られぬとなれば、その結果は忽ち統治政策の上に深甚の影響を及ぼして、民族の前途に一大暗影を投ずるものといはなければならぬ。一と口に外交と呼ばれる國際政策はどうやらお茶を濁す程度であつても、いはゆる内治政策だにその宜しきを得れば、國家は存立の目的を達成するに差支へないかに思込んでゐる人達もあるやうであるが、それは大變な間違ひである。國家存立の基礎を成す社會經濟行政の各般に渉る内部の生活組織は、畢竟外間勢力の刺戟に對抗することにより、その機能に反張の弾力を呈し活潑なる作用を生ずればこそ、絶えず更新して會つて沈滞することなく、これを維持し、擴大し、さうして充實しつつ久遠の命脈を繋ぎ得られるのである。國家の組織が一たびこの反張の弾力を失へば、その生活は固定し、その文化は膠着して、漸次に衰亡の一路を辿る他はなからう。そこで、國際場裏に於ける外交と軍事の一致の活動に少しでも弛緩の形迹がありと看れば、國家主義者はこれを棄置き難しと

七一

し、驟然起つて國防の危機を叫び、時の政府を鞭撻し、國民に警告して極力その挽回の策を講ずるに躊躇すべき謂はれない。同時に他方に於いて、これと反對の立場に在るものは、資本組織の破綻に基く經濟生活の壓迫より、被搾取階級を解放せんが爲め社會革命の烽火を揚げるに至ることは、疑を容れぬであらう。

對外發展の望みがあるが、社會革命の命がけである。

動物はそれぞれ衝動的にその形體色素の變化を來たして、自然の環境に適應する生活の様式を天から授けられてゐるが、人類はさうはゆかない。その代り意識的に四圍の情況を支配し、尙進んでこれを創造する生活の様式を理解してゐる。國家生活に對外發展の望みが絶ゆれば、その社會組織の建直しでも企劃するより他に途はあるまい。社會革命といひ、侵略戦争といひ、全然相背馳する二つの方法のやうに見えて、その實國防の目的を貫徹する手段たるに於いては一つに歸する。何故かなら、國防は國家がその環境に善處するの謂ひに他ならぬからである。進展せんとすれば戦争を免かれず、退讓を

餘儀なくせらるれば革命を避け難き、現代國家の前途は眞に多難多忙といはなければならぬ。

さて、つらつら我邦の近狀を觀るに、海外發展の歩武が停頓するにつれてアメリカニズムの脅威随つて加はり、われわれの經濟生活は日に壓迫せられ、その固有の精神文化を年と共に侵蝕し、かくて平和の怖るべき危険がそこに刻々醗されつつある。この危険は所詮弗の魅力を逞しうして物みなを燃し了らねば止むまじき、資本國家の侵略政策に對して敢へて正面衝突を辭せず、進んでこれに應戰することにより排除せられなくてはならない。ところで、いづれの内閣もこれを支持する政黨そのものが先達となり、アメリカニズムの前に跪いてその毒杯を受け、甘酔の餘り自ら同胞の膏血を搾取してこれに捧げんとする醜態を臆面もなく暴露しつつ、徒らに泥仕合ひのみ没頭

問断なき
政變の反
覆は平和
の危機を
促進する
るを

して毫も覺醒する容子が無い。さうして、無意義なる政變が頻繁に反覆せられてゆく間に、文化の危機は急速度を以つて醸酵し、帝國の運命は、今や滔天の濁流に小舟を操つるやうな状態に置かれてゐる。

民政黨内閣は緊縮政策を一枚看板として、遮二無二金解禁を断行した。金解禁はいつかはいづれかの政府により断行せられなくてはならぬ事柄であつて、財政建直しの一つの階梯には相違ないが、決してその全約でないことは言ふまでもない。しかし、民政黨内閣は金解禁だに断行すれば、萬事は立ろに解決し得られるかのやうに盛んに宣傳して、その時期と準備に一切頓着することなく断行して了つた。さうして、緊縮政策を一層奨励し、その結果として財界の建直しどころか不景氣を一層深刻化し、今更らしく失業者の救済難に自ら悩んでゐる。財界の建直し——全解禁——緊縮節約、といふ三段論法をそのまま轉呑みにするとしても、また目下の不景氣と失業者の激増がその必然の結果であるとないと拘はらず、これが應急並に根本の對策として

緊縮政策は
破綻の金
米の追隨
権に隨
しかす
てらる
る

何等成案の持合せがないといふことは、取りも直さずその財政計劃の破綻を物語るものでなければならぬ。濱口内閣の緊縮政策が、行政各部の豫算分捕りと、銀行會社の不合理なる經營振りと、資産階級の奢侈享樂を防止することなくして、徒らに中流以下の無産階級の消費節約を強要するに止まるとすれば、早晚その一枚看板を引込ます時が來ることは明かである。この井上蔵相の財政計劃の破綻は、米國の金權政策に追隨迎合せんとする幻覺から出發してゐる。

ところで、弗の文化様式に魅惑せられて容易に甘酔から醒めぬ濱口内閣は、その緊縮政策を更に軍備方面にまで及ぼすに至つた。わが全權委員が倫敦會議に臨むに際して、潜水艦の現有勢力維持と補助艦總括七割の、二大原則を國防の最小限度とし、これを國民的信念の問題であるとまで聲明したことは、隠くれない事實である。それにも拘はらず、濱口内閣は若槻全權の請訓に對し、海軍軍令部の意見を無視して回訓を發し、國際協調の精神と國民負擔

本である。米國の經濟侵略は彼國一流の攻勢外交 Diplomatic offensive. によつて支
持せられ、曩に華盛頓會議に於ける奇襲的提案となつて戲曲的效果を奏し、
今亦倫敦會議に臨んで、債權國の顔を利用して一段の成功を収めた。ヒュー
ズの外交爆彈 Diplomatic bombshell. によつて、五對三の劣勢比率に厥落された上に
九國決議を押し付けられた日本の大陸政策が、その後いかに深甚の影響を被つ
たかは、爰に喋喋するまでもないことである。リース松平妥協案にしてから
が支那の侮蔑を買ふだけでもどうせ殊な結果を看ぬに極まつてゐる。倫敦會
議がひとり單なる軍備問題として觀るべきでなく、國防上間接と直接を論ぜ
ず、各方面に容易ならぬ關係を及ぼす重大問題であることは争へない。民政
黨内閣は、我邦か多年に涉り莫大の犠牲を拂つて築き上げた、大陸方面に於
ける勢力範圍を、漸次米國の蠶食に任かして顧みぬのであるか。澎湃として
物みなを呑み盡さねば已まぬ、アメリカニズムの氾濫に日本を浸し、祖先の
遺産を弗の搾取に委ねて悔いぬのであるか。それは財界の建直しなどいふ生

海軍協定
對英獨
送機所
獨社
論會
の氣

温い手段では、到底二度と再び取返しが付かぬことではないか。

想ひ起す英獨海軍協定交渉の當時、獨逸社會黨機關紙フオールウエルツは
論じて曰ふ――

「海軍の縮小は決して望み得られぬことではない。否、寧ろ望ましいこと
ではあるが、ただ、海軍の縮小によつて得らるべき結果は、必らずしも望
ましいことではない。何故かなら、海軍を縮小する結果は勢ひ國家の發展
を阻止し、國家の發展を阻止する結果は遂に内争の端を開き、延ひて革命
の勃發を免かれぬ虞れがあるからである。(中略)それゆゑ、戰爭回避を目的
とする海軍縮小はこれが先決問題として國家生活の根本解決を念頭に置か
なくてはならない。左もなければ、海軍維持の爲に比較的重い負擔をも敢
へてこれを忍ばねばならぬのである。」

民政黨の諸公はこれに對してどう考へるか。井上財政と幣原外交を通して觀
た濱口内閣の施政方針は、國家生活の根本解決を念頭に置くことなくして、

その消極政策を有らゆる方面に及ぼさん、とする點に於いて實に甚だしき錯誤に陥つてゐる。幣原外交が米國艦隊の大舉襲來の目を待たぬうちに夢幻泡影と消え去るであらうことはいふまでもないが、それに先立つて井上財政の破綻を來たすことは必定であり、かくして、緊縮一點張りの民政黨内閣も、大抵前途は見えてゐる。

次いで來るべきものはいづれ政友會内閣であらうが、この内閣に對してもわれわれは大した期待を懸けられない。政友會は民政黨よりも陽氣で実行力には富んでゐるに違ひないが、左りとて國家の經綸を託して安心の出来る人物は缺乏を告げてゐることは兩者甲乙なく、開國進取とか産業立國とかいふ標語を掲げて、連りにその積極政策を説いてはゐるものの、嘘むらくは、いかにしてこれを實現すべきかの具體提案となると、どうやら怪しいものであるから、いづれ何んとかお茶を濁してゆくうちに、權權を出して引退がるくらゐが落ちであらう。かくて朝野の兩黨交國家の大事を餘所にして徒らに政

昭和維新
争か
か
日米戦

權の争奪にのみ没頭し、いづれの内閣も短命に終つて更迭に次ぐに更迭を以つてするとなれば、弊端百出して到底これを匡救するに由なく、世相は益險惡となるばかりで人心亂を思ひ、遂に意外の激變を惹起するに至ることは殆んど疑を容れない。

さうかうするうちには、勿論種種雑多の人達が飛出して随分思切つた政府も出來よう。われわれは反動内閣も結構と思ふし、労働内閣も別に毛嫌ひするには當らぬと思ふ。結局どこの誰がどんな政府を組織せうと、それは一切問ふ必要はない。ただ、目下の難局を見事に切抜けて國運を益隆昌に導いて呉れさへすればそれで可い道理である。われわれの直面する八方塞がりの状態は、國家生活の根本解決に手を觸れることなしには、所詮これを打開すべくもないとはいへ、事を成すは畢竟人に在る。ところで、既成政黨にその人がないと同じ様に、官僚軍閥財界民衆いづれの方面を見渡しても、現に社會に活動してゐる限りの知名の入達の間には、これぞと思ふ傑物はただの一人

時艱英雄
懐ふと
か懐ふと
は眞にこ
るの事であ

八二

として見當らぬとは、いかにしても心細い。時艱英雄を懐ふとは眞にこの事である。この儘に押進んでゆけば、日本は没落の他はないが、そこは好く仕たもので、天必らず無名の英雄を降して、必退來の二重態より神國を拯ひ出すであらう。英雄といふに語弊がありとすれば、多數の諒解を得て、多數の意志を代表し、多數の支持を受くべき一大人格と修正しても可い。その一大人格はベトニムツソリニーか、ケマルパシヤか、但しはマハトマカンチーか。兎も角も大西郷のいはゆる、金も入らぬ、名も入らぬ、命も入らぬ、何も彼も入らぬ、至誠奉公の無名の青年でなければならぬ。昭和維新はその無名の青年によつて成し遂げられ、文化の危機に對し敢然として正義の戦ひを宣し、かくて精神日本の建替えに成功し、われわれを新らしき運命に導くであらう。

海軍の任務

- 海軍の任務は國防政策の遂行に在る……………八三―九四
- 平和の維持は國防海軍の最高任務である……………九四―一〇三
- 海上權力と海洋の自由は何を意味するか……………一〇三―一二九
- 戦争の手段は三者いづれを擇ぶべきか……………一二九―一三六
- 索敵と封鎖は同一の作戰目的を有する……………一三六―一五二
- 海戦は人智と機力を悉くした闘技である……………一五二―一八四
- 貿易破壊戦は劣勢海軍の腹癥せに止る……………一八四―二三四
- 海權を伴はぬ大規模の入寇は望みがない……………二三四―二三五
- 艦隊はその根據地を以つて歩むのである……………二三五―二七七

平和は現世に於て望むべからず。人類の欲望が進歩に存する間は競争は遂に免るべからざればなり。吾等は戦争と名くる一種の競争にのみ特別の罪惡ありと思惟するを欲せず。

—高山樗牛

海軍の任務

海軍の任務は国防政策の遂行にある

關東大震災火災の際、軍艦が阪神との間を往來して大活動をしたことは、今尙世人の記憶に残つてゐるであらう。さういふ非常時に於ける客貨の輸送聯絡や、難破船の救助などに盡力することも勿論海軍の任務のうちであり、さうかと思へば、また芽出度ひ方では、わが艦隊が戴冠式とか獨立祭とかいふ國際の儀禮などに参列して、大歓迎を受けた光景を時折新聞紙上に散見するが、そんなことも同じく海軍の任務のうちである。その他將校下士卒の練習とか、種種の實驗とか、沿岸島嶼の測量とか、就役艦船に對する煉炭・重油用水、糧食などの積取供給とか、凡そ有らゆる雜役何一つ海軍の任務として大切でないものはない。軍艦も數多いが、そのうちでも、毎年遠洋航海に従事

する練習艦隊を始め、水雷砲術航海各練習艦測量艦給炭給油給水各特務艦稀に第二線列以下の海防艦巡洋艦驅逐艦などいふ、比較的戰術價値に乏しい艦船が専らこれらの雜役に服する。

しかし、列強が年年莫大の經費を投じて堂堂たる艦隊を維持する理由は、決してそんな雜役に使用する目的に出たものでないことは、いふまでもなからう。我邦は領土相近接する支那の事變に備へる爲に、揚子江を中心とする中支那及南支那沿岸に第一遣外艦隊を、又白河を中心とする北支那沿岸に第二遣外艦隊を、配置してゐることは誰もが知る通りである。その警備任務は主として小型巡洋艦河用砲艦驅逐艦などいふ、矢張り戰術價値の少い艦船の使命とするところである。毎年春先になると、支那は極まつて年中行事の戰争ごつこが始まる。今年も最うそろそろ始まつても可い頃と思つてゐると、果せるかな、山西の閻錫山が反蔣通電を發したとやら。左すれば、これから暫らくの間は、聯合通信や國際通信の特電で日日の新聞は定めし賑ふことで

あらう。石井・ランシング協定のうちに「特殊の關係——随つて亦特殊の利益を有する」とある、支那の政局は何時いかなる事變の突發すべきや、晨にして夕を測られぬ極めて不安の状態に置かれ、警電一たび到れば、直ちにわが特殊權益に危殆を及ぼすこと掌を指すよりも明かである。その際漫に陸軍の出動を敢へてせんか、忽ち領土主權の侵略であるとして、輒もすれば中外の誤解を招き易い惧れがある今日の時勢では、彼邦の南北各處に散在する、わが居留地の守備居留民の生命財産並にわが特殊權益の保護を擔當するものは、差當り第一第二遣外艦隊を措いて他になく、その使命の決して輕からぬことは贅するまでも有るまい。海外に於ける自國の利權擁護——これは正しく海軍の任務として頗る重きを成すものであることは争へない。

支那の戰争ごつこも、支那人のいはゆる聲討程度の年中行事を繰返してゐるうちは可いとして、雲行次第ではそれがどう發展せぬものとも限らず。列強の利害關係が何分錯綜してゐるだけに、その影響するところも随つて甚大

であるから、又始まつたくらゐで済まされぬ場合がないとはいへない。支那は何處までも極東の巴爾幹である。次の世界大戦は支那問題を禍源として、いつかは太平洋の波を湧かす時期が来るに違ひない。どこの誰が何んと言はうと、こればかりは已う動かぬ見當である。さうなれば可厭や應はない。御苦勞でも東郷元帥を煩はして聯合艦隊で乗り出して貰ふより術はない。いざやの場合の手筈はいつでもちやんと整つてゐるべき筈である。その手筈を海軍では出帥準備 Mobilization. と呼んでゐる。出帥準備は陸軍でいふ動員に當る。紛らばしい文字であるが、戦闘準備 Cleared for action. とは違ふから混同してはならない。さて一旦緩急あれば、苟しくも利用し得られる限りの艦船は、悉く作戦の目的に使役せらるべきことは勿論であるが、そのうちにも出征艦隊の精鋭たるべきものは、疑ひもなく平時より就役しつつある、第一線列の戦艦、巡洋戦艦、巡洋艦、驅逐艦、潜水艦、特務艦などの、いはゆる常備艦船で、これらの艦船は、時として他の雜務に服する場合がないではないが、先づ大體に於い

出帥準備
と戦闘準備
を混同
してはな
らぬ。

て出帥準備がその主務であるといつて可い。常備艦隊は一旦解散して更に編成替をする手数を掛けるまでもなく、そのまま直ぐにも戦場に臨み得られるやうに、出帥準備が不斷に整つてゐなければならぬ筈である。世界大戦の直前、恰も北海に於いて大演習の舉行中であつた英國の大艦隊 High Sea Fleet が、命令一下時を移さずヘリゴランド沖合に出動して、獨逸の大海艦隊 High Sea Fleet の機先を制し得た一事は、何を意味するか。そんなことは素より毎に期待し得られぬ特例に過ぎぬといふであらうが、しかし、出帥準備が不斷に遺憾なく整つてゐればこそ、畢竟さうした神速の行動も成し得られる道理であつて、この一事は偶いつて常備艦隊の任務がいかに重大であるかを示めすに足る。

これらの任務は一朝外國と砲火に相見える段となると、全然一變して、陸上部隊と海上部隊を問はず、凡そ軍事的價值のあるものは、悉くこれを集結して非常状態に置き、全力を傾倒して一に作戦の目的を遂行すべき新規の任

務に就かしめる。そこで、海軍の任務はこれを平時の任務と戦時の任務に二大別し、更に平時の任務は、

- 一、戦時に對する艦隊の出帥準備
- 二、海外に於ける自國の利權擁護
- 一、前二項を除く以外の要務

また戦時の任務は、

- 一、海上權の獲得
- 一、敵國への入寇
- 一、敵の交通遮斷

に細別して説明するの慣ひである。通俗の解釋としては先づこの程度で満足すべきであらうが、それより一步突込んだ説明をすれば、海軍の任務は陸軍と相俟つて國防政策を遂行するに在る、といはなければならぬ。

そこで、國防政策 *National defence policy* とは抑も何を指すか、といふ疑問が更に起つて来る。人もわれも日常國防を口にしながら、その實これに對する明快な概念を擲んでゐる向は極めて少いやうであるから、次に聊か説明の必要がある。國防の解釋は、今日までのところ、國家の防衛の義であるとする甲説と、侵略を被護する美名若しくは遁辭に過ぎぬとする乙説と、大體二通りに別かれてゐるやうである。ところで、元來侵略といひ防衛といふのは攻撃といひ防禦といふのと同じく、富強國と貧弱國の間に於いてこそ、その甄別が多少判然せぬでもないやうなもの、一たび對等國の關係となると、侵略と防衛の争ひは結局神の審判を仰いで決定するより以外に、所詮判然した甄別の仕ようもない。畢竟、甲乙二説は物の兩面を互に反對の方向から指して、表といひ裏といはんほどの見方の相違に止まるのであつて、物それ自體の本質的説明にはなつてをらぬやうなものである。しかし、そこに何んとなく臆氣ながら、國防といふ大體の輪郭が掴めさうな心持がせぬでもない。それは

國防とは
國際的善處
に於ける
善處を
實現する
のである

何かと突き止めると、他でもない、一國とその環境の國際關係である。生物がそれぞれその自然的環境に適應するやうな、生活様式を持合せてゐるやうに、われわれ人類の營む國家生活には、當然といふよりか寧ろ必然的に、その國際的環境に善處し得られるやうな組織と、機關と、さうして政策の持合せがなくてはならない。その國家の組織機關政策を指して、われわれはそれぞれ國防組織國防機關國防政策と名けるのである。言換へれば、國防とは國際的環境に善處して國家生活の擴充を期すべき組織なり、機關なり、政策なりの義に他ならない。國家組織は主觀的には統治組織である、と同時に客觀的には國防組織でなければならぬ。即ち一國の社會組織經濟組織政治組織は互に相俟つて、その國際的環境に善處し得られるやうな、屈伸自在の彈力機能を備ふべき筈である。その彈力機能は對內的には統治政策となつて働き、また對外的には國際政策となつて働く。國防政策は二者相應じて始めてその宜しきを得るのである。

國際に善處して一國の安寧と福祉の擁護に當るものは、いふまでもなく外交の任務である。ところで、その外交の任務は可也限定的なもので、背景のいかんによりその可能の程度を支配せられ勝ちであるから、洵に心細い。鳥渡考へても、列國が互に持ちつ持たれつで立つてゆく現代の國際關係に於いて、その共通意志の投合により一般利益の増進を圖ることは、人類文化の上からいつて、いかばかり喫緊であり、且また歓迎すべきであるか、大底知らさうなものであるが、残念ながら、公平に判然して明かに一般利益と目せられる事柄に對してすら、列國の共通意志が間違ひなく投合するものとは限らない。そんなら、利益交換の問題だけでも、攻めては交讓妥協の精神によつてどうなり無事に落着くかと思へば、これがまた却却さうばかりもない。それもその筈、國際關係に於ける交讓妥協の精神は、勿論高尚なる道義の觀念から出たものではなく、畢竟相互の實力を確認する結果として、各その主張を強硬に支持することによつて受くべき利益と、偶激發することあるべき

兵禍の損害を、理性の衡器にかけて較量した利害の計算に基いたものである。一歩を過まれば忽ち正面衝突を惹起す惧れなしとせぬからである。一般利益または利益交換の問題でさへ、尙且さうであるとすれば、ましてやそれ以外の問題——殊に双方の利害が互に相背馳し、その影響するところ自國の安危存亡に關する根本問題と來ては、いかに折衝樽俎の限りを悉くしたにせよ、到底圓滿の解決が望み得られる道理はなく、互に干戈に訴へてその初志を貫くより適當な手段がないことは、避け難い必然の勢ひであるといはなければならぬ。詰まるところ外交は實力の反映に他ならぬのであつて、その背景を缺ぐときは、いかな懸念の努力も遂には無効に歸する。さうして最後に取殘された強制の手段を擇ぶの止むなきに至るのである。その強制の手段としては戦争と軍事外交の二通りが數へられる。軍事外交は平時封鎖保障占領武力干渉などの總稱で、その形式なら、實質なら、目的なら、手段なら、何一つ戦争と違つた點はない。殊に被封锁國なり、被占領國なり、被干渉國

なりが、再び秩序を恢復して自ら軍備を整頓し、若しくは他の強國の援助を藉り、一轉して封鎖國占領國乃至干渉國との間に戦争を惹起す場合も想像せられるので、一層兩者は混同せられ易い。しかし、軍事外交 *Military diplomacy* は革命のソビエト聯邦や中華民國のやうな、主權が分裂してその所在すら判然せぬ、不完全國家に對して行はれる、いはば國際公法の救済手段とも認めらるべきものである。そこが戦争と異なる點である。ただ説明の便宜上最後の手段とは通俗を旨として専ら戦争を指すものと解釋して何等差支なく、嚴格に言ふ場合は、戦争と軍事外交を一括した軍事政策と解釋すれば可い道理である。即ち國際政策は次の二途を出でない。甲は妥協手段でこれを外交といひ、乙は強制手段でこれを戦争といふ。戦争はいかなる妥協手段も全然効果なきに至つて起るものであつて、平穩無事の日に於いて行はれる外交政策の、他の手段を以てしたる繼續に過ぎない。妥協と強制と手段こそ違へ、その國際政策たる形式に於いては一つに歸する。それゆゑ、戦争の形式

的定義は、一國の意志をその敵に強制するを目的とする國際政策である、といひ得る。國家の意志の内に發動するものは權力であり、外に發動するものは威力である。威力は一國の實力がその軍事組織に集約せられたる場合にのみ他ならない。そこで、海軍の任務は極めて明瞭となつて来る。海軍は平時に於いては外交政策の支援を任務とし、一旦緩急あるに及んでは、外交政策の追求して而かも所詮達成し得られぬ目的を、敵に強制する戦争の實施を任務とする。一言以つてこれを掩へば、海軍の任務は陸軍と相俟つて國防政策を遂行するに在るのである。

平和の維持は國防海軍の最高任務である

世界地圖を披け。さうして日本の位置を檢せよ。然らば、わが國防をいかにすべきかの大體の見當は自然と付くであらう。われわれは決して日英同盟の功徳を評價以上に讃譽するものではないが、お蔭で日本も最近十數年前ま

以實制夷
は支那の
傳統政策
である。

では海上交通の自由が利き、極東大陸の方面はいふまでもなく、更に進んで南洋濠洲印度方面よりの物資の供給も安全であつた。そこで、縦しや支那に排日抵貨の問題が起らうとも、左して心配するほどの事はなく、ひたすら北方よりする巨人の脅威に對して、萬一を警戒しさへすれば可かつたのであつた。しかし、今日となつては事情は全く一變した。世界大戰後太平洋の彼岸に頓に勃興した、米國といふ成金の新たなる脅威は、北方の巨人の脅威に代つて更にその度を増して來た。これが爲め、日本は間逆の場合に海上交通の安全を期し得られぬ恐れがある上に、隣交の老少年動もすれば虎威を假りて狐心を挟み、事毎に傳統の秘策に出勝ちであるので、たださへ物資供給の途に窮する八千萬同胞の死活を、直ちに制せられる傾向の著しいものがある。さすれば、帝國がこれら四圍の情況に善處して、その國運の恢弘を圖るには、層一層周到また慎重の態度を以つて進まなければならぬことは、多くの辯を費すまでもあるまい。即ち帝國の國防政策は、叙上の國際的環境の變化と領

土の地理的關係、人口と食糧の問題、國內の秩序維持と經濟組織、就中材料資源の需給と帝國特殊の位置などに鑑み、獨力能く國家の存亡と民族の繁榮を確保し、一朝有事の日に當つて迅かに外敵の侵寇を擊攘する、と同時に海陸交通の自由を獲得するを以つて眼目とし、一般經濟を極端に壓迫せぬ程度に於いて、財政の許す限り、最大威力の軍事組織を整備することが何よりも肝腎である。居常互に相呼應して極東に於ける帝國の地歩を覆へさうとする、敵意ある鄰人の包圍の裡に在りながら、所詮見込のない平和の永續に望みを繋いで、軍備の充實を軍人の私心の結果とのみ臆断し、國民負擔の輕減を理由とする、誤解せられたる經費の節約を絶叫するなどは、到底正氣の沙汰とは思へない。

日露戰役後、東洋の海上權は對馬海峽より臺灣海峽に移つたといひ、また馬刺加海峽以東に移つたともいふ。前者は日本側、後者は日英同盟を破棄した英國側の見解であるが、いづれも言外にわが國防の限界を暗示した警句とは思へない。

海軍の
最善の
防禦の
小國の
防限

して傾聽の値ひがある。今帝都を中心とし新嘉坡に至る直線を半径として圓形を描くときは、その西半圓は南は暹羅安南より央ごろ支那本部を経て、北の方滿蒙及蘇領極東三州に至る大陸面を包み、またその東半圓は南は關領東印度諸島より比律賓群島及わが委任統治諸島を経て、央ごろ布哇群島を掠め、北の方アリューシアン列島を過ぎり、更に勘察加半島の頸端に盡くる大洋面を含むを見るであらう。將來太平洋の爭鬪戦が起る場合、わが帝國はこの大圓形を國防圈 *National Defence Area* として維持するを理想とするが、比律賓を米國が掌握するうちはその萬全を望み得られぬから、開戦の初期に於いては、帝都を中心とし臺灣の鷺鷥鼻に至る直線を半径として描いた、小圓形内の海陸交通の自由を確保するを以つて満足せなければならぬ。これを概括すれば、福建の厦門より武漢——河南——歸化城を経て、滿洲里を過ぎり蘇領コライエフスクに至る、陸正面の作戰はわが陸軍の擔當するところで、臨機緊急に應じて各兵要地の占領とその相互並に後方聯絡の守備に任じ、一方臺

獨海峽よりグアム島を経てアリヌーシアン列島を掠め、シベリア勘察加のペトロパウロフスクに盡きる海正面の作戦はわが海軍の擔當するところで、その急所に於ける海上權の獲得と各重要航路の保護に任じ、兩兩相俟つて物資供給の圓滑を期するのが國防の主眼である。この小圓形は實にわが最小限の國防圏であつて、帝國がこの圏内にその作戰區域の後退を餘儀なくせられる場合は、忽ちその經濟生活の破綻を見る結果となるから、かかる場合を想定し得ぬ、と同時に、帝國はこの圏外を超えてその攻勢作戰を、いづれの國に對しても實施する意圖を有せぬばかりでなく、またこれに必要な強大の海軍を有せぬのである。帝國が倫敦會議に臨むに際して通く中外に宣明した「いづれの國の脅威ともならず、ただいづれの國よりも脅威せられぬ勢力」といふ標語こそは、取りも直さず、わが國防海軍の唯一さうして無二の最高任務を如是に物語るものでなければならぬ。

しかし、この海軍の最高任務は軍事眼を放れて、専ら政治的見地に基き、

政治的見地
に基き
最高任務
の海軍

より一層適切なる説明を加へることなしに、多數の理會ある民衆の共鳴を博せんとしても、所詮徒勞に歸するの他はあるまい。斷るまでもなく、平和は國際の常態であつて、戰爭は一時の變調に過ぎない。そのいつを當所もない一時の變調に備へる爲に、折角巨億の國帑を糜して建設した艦隊が、敵にただの一發も實彈を見舞はず仕舞ひに、結局幾年かの就役後ぼつぼつ廢艦處分に付するの他はないとすれば、こんな不生産極まつた話はなく、永年海軍にかける經費のたとひ幾割だけでもせよ、他の事業に振向けたなら、今日のやうな入學難はなく失業者は出ず、生活苦は除かれて、都會も農村も福福となり、國民全體がゆつとりした愉快な氣持ちで暮されうもの、とかう一途に思ふのも滿更無理からぬことである。ただ茲に考へなければならぬことは、それを平和の資賜として祝福する先きに、その平和の資賜が果して何んの結果であるかの點である。左すれば毎年莫大の金を食ふ艦隊が、丸切り戰爭をせぬでそのまま立腐れとならうとも、穴勝ち無用の長物であるとはいへまい。

わが国防海軍は無論戦はんが爲に整備せられたものには相違ないが、その最高任務は畢竟戦はんが爲に戦ふのではなくて、ただ戦ふ必要が起つた場合に戦ひ得られる用意をしておくまでである。帝國の海軍は、自ら進んでその精銳の度合を試験して見る理由もなければ、また敵から試験して貰ふ因縁もない。英國がその「沈黙の大海軍」The Grand Silent Navyを矜りとしたやうに、帝國の海軍は未だ會つて敵意を挟みて一弾だも發射したことのないのを矜りとする。この意味に於いて海軍は結局一國の警戒色であるともいひ得る。それはちやうど巡查が抜刀を罰則として帯剣を許されながら、立派にその職責を果してゐるやうなもので、沈黙の存在そのものが國際強盜の接近を豫防し得れば足りるのである。言換へれば、常備艦隊は、平和の攪亂者に警戒を與へて國際の不祥事を防壓し、野心家の侵略に對する國權の擁護者として、國際警察の役目をするやうなものである。偶その武装が絶大の威力を持つてゐるからといつて、それは何も破壊の實行を目的としたものではなくて、寧ろ

その破壊を必要とする原因を除く趣旨に出たものに過ぎない。支那の兵家も道破してゐる通り、百戰百勝よりか、戦はずして勝を制するのが秘訣で、それには何が肝腎かといへば、他でもない、いづれの國から見較られぬ程度に軍備の充實を圖ることである。何故かなら、軍備の缺陷は忽ち對手國の看破するところとなつて、その飽くことなき野心を挑發し、延ひて避け難き戦争に導く危険を免かれ得ぬからである。「平和を欲せば戦争に備へよ」といふ千古の金言は、今尙眞理としてこれを尊重せなければならぬ。そこでわが国防海軍の最高任務は何かの問ひに對して、われわれは躊躇なく答へる、東洋の平和を維持せんが爲に環海の覇權を確保するに在ると。

われわれの祖先は、天佑とその殉國の精神により元寇を築紫の一角に撃攘して、社稷を磐石の安きに置き、またわれわれの父兄は露國艦隊を對馬沖に殲滅して、東洋平和の基を拓いた。この千歳不磨の光輝ある歴史は、わが金甌無缺の國體を永く子孫に繼承すべき義務あることを、われわれに昭垂する

ものである。庶幾くは、わが貴衆兩院議員はその黨派のいかに拘はらず、苟しくも海軍に關する限り、全院一致してその議事の進行を妨害することなく、わが海軍を毎に政争の圏外に置き、國民舉つて極力これを支持する決心を示めされんことを。

海上權力と海洋の自由は何を意味するか

日常の慣用語は突然その意味を聞かれても鳥渡返答に困ることがあるのは、誰しも経験するところであるが、海上の覇權とか、海上權力とか、海上權とか、制海權とか、或は單に海權とかいふ慣用語に對しても亦同様の感なきを得ない。

この慣用語は十九世紀末このかたの新熟語でもあるかに思ふものがあろうも知れぬが、その起源は相當に古い。即ち海洋の管制 *The Control of the Sea* といふ思想は、遠く希臘の古へに胚胎し、羅馬とカルセーデの海戰より中世迄

を経て漸次に發達し、降つてエリザベス女皇とフィリップ二世の久しきに渉る争覇戰當時、英國の文豪によつて廣く一般に提唱せられるに至つたことである。

*「海上を支配するものは甚だ勝手が好い。戦争はその思ひの儘になる。海上に於ける勢力の優越は素晴らしい。何故かなら、東西印度の富は大部分海權の添物に過ぎぬやうなものである。」

これはロイド・フランシス・ペーコンの言葉である。更にサアウオーター・ラーレは同様の思想を一層發拔なる文句に言表はして曰ふ、

*「海洋を支配するものは貿易を支配する。されば、世界の貿易を支配するものは世界の富を支配し、隨つて亦世界そのものを支配する。」

この標語は、苟しくも海權を口にするほどのもので、誰一人知らぬものはないくらゐる普遍的であるが、それは畢竟今日のやうに海戰法規も整備せず、交戰國と中立國の權利義務の關係も面倒でなく、暴力のみがひとり風伯のやう

に四海を荒れまはつてゐた時代の、海賊民族の代表思想を簡潔な文字に巧く纏めたといふだけのこと。世界の海軍を壓倒し、世界の貿易を壟斷してゐた當時の、大英國の一文豪の放言にとゞまると思へば別段不思議はないが、海權を説くものが未だにこれを金科玉條視するに至つては、見當違ひも甚だし

い。
海洋の使用は自由であつて、すべての民族に對して甲乙なく、一樣に開放せられてゐるべきが建前でなければならぬ。領海三哩^{マイル}以外は、世界の何處の果に往つても、本質的にさうあるべき筈のものである。われわれは平和の日に當つて海權の消長を認める理由を發見し得ぬのである。これは別段説明を須つまでもなき自明の事柄である。海權は或る一國がその敵國に對して、作戰の目的^の爲に一時或る海面の閉鎖を強行するに方つて、始めてその意義を生ずるのであつて、中立國は直接何等の影響を被むることはない。それは或る一國または數國が、その作戰に必要な期間だけ或る範圍の海面を宛なが

ら自國の領海に於けると同様に、自由に使用せんとする交戰權の働きに他ならぬので、いかなる中立國の艦船も、敵國に對して直接軍事的幫助をなし、若しくは間接に敵國の利益となるべき行爲に出ぬ限り、これが爲め別段拘束せられる義務を負ふべき筋合のものではない。詰まり海權といふ術語は戰時を除いては、何等の意味を成さぬ、と同時に、戰時とても敵對國間の關係に限ることは明かである。それゆゑ、われわれが平生或る海面の覇權に就いて云爲するのは、畢竟或る一國はその假想敵よりも優勢の海軍力を擁してゐるから、一朝有事の際にはその海面の覇權は必然その一國の掌裡に歸するに相違ない、といはんほどの豫斷に基いた想定に過ぎない。

海權は交戰國間の實力問題であつて、斷じて事實問題ではない。われわれは或る海面に於ける敵の配備がない場合、またはたとひ配備があつても、敵が決戦を回避して出動せぬ場合の海權の存在を肯定し得ぬのである。前者は全然問題ではないが、後者殊に甲國が乙國に對して軍事封鎖を完全に維持す

海權は交戰國間の實力問題である。

る場合、甲國はその封鎖海面に於ける覇權を有する、といふを得るかどうかは多少問題とならぬこともない。しかし、それも深く考へれば、事理極めて明白であつて、毫も疑團を挟む餘地はない筈である。封鎖國は敵が何時出動するか判らぬから、断えず監視を嚴重にし、出動すれば直ちにこれを邀撃し得られるやうに、常にその主力艦隊を一處に集中して置かなければならない。かくて、日を曠しうすること久しきに彌れば、勢力の削耗に擔て加へて士氣の弛廢を招く虞れがある。そこが敵のつけめであるから、敵はその機を外づさず、得たり賢しと、或は反覆奇襲を試み、或は部分攻撃を敢へてし、苟しくも身分に利ありと見れば、尙進んで決戦を求めざるに出ようも知れない。随つて、封鎖國の比較的有利な情況の下に在るやうに見える作戦行動も、その實不斷の脅威を受けてゐることは争ひ難く、決してその自由を得たものとはいへない。ただ敵が封鎖國の優勢な海軍力に壓倒せられて、港内深く潜伏し、嘗に決戦を回避するばかりか、他のいかなる積極的企圖に出るでもなく、

全然閉息の止むなきに至つた間は、その封鎖國を中心とする海權が一時封鎖國の手中に落ちたやうにも思へぬではないが、それとて、敵がそのままそつくり無傷でその勢力を保存してゐる分には、矢張り封鎖國の海軍に取つて一大牽制であり、且又一大障碍であることに變りがなく、結局封鎖國はその海上に於ける自由なる支配者とは目せられぬのである。假りに封鎖の繼續中、敵がその同盟國の救援を受けるとか、また優勢なる海軍國が新たに敵に加擔して參戰するとかしたなら、果してどうである。そこを考へると、敵の主力を一處に閉塞しただけでも、無論成功には相違ないが、閉塞による行動の自由は極めて限定的であるから、成し得べくんば敵の出動を餘儀なくせしめて、これを撃滅するの優れるに如くはない。かくて、敵の主力を掃蕩することによつて完全にその海上を支配すれば、他のいかなる新規の任務に服するにしても、また所規の敵を邀へて更に作戦を実施するにしても、絶對にその行動の自由が得られる道理である。

海權の獲得は優
 勝の褒賞なら
 ない

海權の獲得は勝利の結果である。勝利なき處に海權はない。海權は競技會に於ける選手權見たいなもので、優勝の褒賞に他ならない。ただ一回の競技に於いてこれを贏ち得ることもあれば、數回の競争を重ねて、惡戰苦闘の後辛うじてこれを贏ち得ることもあるが、いづれにしても、對手が再び起つて競争する念慮を斷つに至つて、始めてこれを保持する榮譽を荷ふ道理である。海權も亦その通りである。少くも敵の主力の覆没を見ぬうちは、これをその手中に收め得たものとはいへない。海權はただ全勝によつてのみこれを確保し得るのである。世界大戰の事例を引いていへば、英國はフォークランド島沖の勝利によつて、南太平洋に於ける霸權を掌握した。しかし、それは獨逸に對してのみさういふことを得るのであつて、智利に對して、また亞爾然丁に對してさうであつたといふことを得ない。何故かなら、この兩國は中立であつたからである。獨逸はリガ灣頭攻略の結果として、極めて限定的ではあつたが、露國に對してポールチック海に於ける行動の自由を得た。しかし、

英國に對して、また佛國に對しても同様であつたとはいふことを得ない。何故かなら、ポールチック海方面にはこの兩國の海軍の配備がなかつたからである。更に通俗の解釋として、英國は大海艦隊の離伏によつて獨逸に對して北海の霸權を掌握し、伊太利はポトラ軍港の封鎖によつて埃匈國に對してアドリアチック海の霸權を掌握した、といふのは敢えて差支ないやうなもの、勿論正しい解釋ではない。中欧同盟國は、獨逸も埃匈國も、ひたすら陸戰のみ重きを措き、その海軍は勢力の保存といふ誤解せられたる方針の下に終始その港内に離伏して何等目覺ましい積極的作戰に出なかつたので、聯合國海軍は北海と地中海の兩方面に於いて比較的行動の自由を得たのであつたが、地中海の方面は問題外として、ジェットランド沖海戰の手際を見ても判る通り、英國の北海支配權はどうやら危ぶなつかしいものであつた。まして聯合國が同盟國に對して地中海印度洋太平洋西洋に於ける霸權を掌握したといふをや。この點に於いて、日露戰役は實に再び得難き貴重なる教訓として、

永へに記憶せらるべきものである。極めて概括的に言へば、我邦は旅順の封鎖によつて事實上臺灣海峡以北の海面に於ける行動の自由を得たのであつた。しかし、黄海に於ける覇権を確保したのは、八月十日の海戦に旅順艦隊を撃破した結果であつて、日本海に於ける覇権を確保したのは、浦鹽艦隊との遭遇戦に勝利を獲た結果であつた。さうして、更に日本が露國に對して東洋の覇権を掌裡に收め得たのは、實にローゼストウエンスキー提督の増遣艦隊を、對島沖の大海戦に殆んど全く殲滅せしめた、赫赫たる勝利の褒賜に歸せなければならぬのである。かかる偉功は素より空前絶後ともいふべき千載罕觀の事柄とはいへ、抑も亦勝利なき處に海權なし、と斷ずる最も雄辯なる左券に他ならない。

これを要するに、海權の概念に缺ぐべからざる主要屬性は、實力によつて得らるべき行動の自由といふことである。行動の自由といへば、小航海及沿岸漁獵の自由は國際規約の保障するところであるから、問題外として、普通

海權の眞實の價値をその意義と見よ

一般航海及通商の自由を含むものと解釋する慣ひであるが、この解釋は決して正當とはいへない。何故かなら、空中及水中攻撃兵器が發達した今日、それは必然的に勝利の結果に伴隨するものとは限らぬからである。そんなら、これまで屢指摘した行動の自由とは何かといへば、他でもない、作戦行動の自由を指したものであつて、偶これに伴隨する副現象に過ぎぬ一般航海及通商の自由を含まぬのである。そこで、海權の概念は極めて明白となつて来る。即ち、

甲國が乙國との海戦に勝利を博し、由りて以つて或る海面に於ける作戦行動の自由を得るときは、甲國は乙國に對してその海面の覇權 *The Command of the Sea* 或は單に海權 *The Sea Power* を有する。

といふのである。尤もこれは著者の獨斷に止まるが、蓋し正鵠を得たものと思ふ。

もし海權が限定的であるのに失望して、その價値を疑ふものがありとすれ

The Brit
ish Navy
のうちに
ある文句

ば、それは限定的であるので、却つてそこに價值があることを察せぬものである。海權は實力の問題であればこそ始めて法理的意義があり、作戰行動の得失のみに係はればこそ、正しく海洋自由の精神に合致するのである。繰返して曰ふ、海權は戦時或る一定の期間或る一定の海面に於ける敵對國限りの優劣問題である。いづれの國が能く世界の海權を支配し得るものぞ。世界の貿易を支配し得るものぞ、世界の富を支配し得るものぞ。世界そのものを支配し得るものぞ。英國が上下を舉つて、海權の意義を有らゆる海洋に於ける有らゆる行動の自由、と解釋して傲然として憚るところがなかつたのは、畢竟その擁する世界最大の海軍の勢力にわれから眩惑して描いた幻覺なり、妄想なりの所爲でがなあらう。その妄想なり幻覺なりも、多少大戦中の不成績に省みれば、流石に描かうとても描かれぬ筈であるが、未だに動もすればむかしの見果てぬ夢の跡を追ひ勝ちであるらしいので、何んともハヤ氣の毒の至りである。英國はその意の儘に戦ふを得た。その軍隊を海外に自由に派

遣するを得た。さうして、獨逸はその領土を侵略し能はなかつた。海上を支配した英國はまた貿易を支配した。その貿易は平時と殆んど變らぬ程度に行はれた。しかし、敵手たる獨逸の貿易は全然停止した。彼國有數の職者——海軍通として名高いカール・ロートン卿 L. G. Carr Loughton. まだがこんなことを言つてゐるやうであるが、それを一體全體どこの國のお蔭と思ふ。日本か青島を攻略して獨逸の足場を拂ひ、フォンスピー提督 Admiral Von Spee. の東洋艦隊を南方に壓迫したからこそ、威海衛も、香港も、新嘉坡も、印度も、新西蘭も、漳州も、無事安泰であつたのではないか。さうして、更に進んでは、日本がその海軍を速く印度洋より地中海へと出動せしめて、参戰國の義務を忠實に履行したからこそ、敵の怪艦艇が頻繁に出沒する裡を、何んの故障もなく兵員物資の輸送を完了し得たのではなかつたか。それは兎も角として、獨逸の誤算の結果に由るとはいへ、英國は北海の管制權を掌握し、さうして、その作用として貿易の支配權をも獲得した、といふやうに斷定するのは決し

て正當の解釋と認めるを得ぬのである。海權の意義を叙上の範圍に限定するのは、戰爭の進化に伴ふ必然の歸趨であつて、實に現代國家の義務であると確信する。

ところで、今更ながら淺聞しきは人間の本能である。戰爭は外交の追求する目標を達成しさへすればそれで好ささうなもの、存外さうばかりもなく、いつかその目標を超越して敵意そのものを對象とし、互にいかなる手段に訴へてでも、ひたすら敵を屈伏せねば止まじとする、鬭争心理の支配のままにその作戰を極端に指導し、遂に局面をして往往拾收し難き邊まで發展せしめることがあるので、問題は兎角面倒にも成らうといふもの。現に大戰中英獨兩國は一方が北海全面を戰爭區域 *War zone* とすれば、一方はまた大不列顛及愛蘭の環海を戰爭區域 *War zone* とし、潜水艇の無警告撃沈に對抗するに、商船の臨檢搜索及連續航海主義の勵行を以つてするなど、報復の名の下に各その交戰權を無制限に擴張した。さうして、その結果中立國をして海洋の自

由を主張せしむるに至つたことは、洵に是非もない次第である。

抑も海洋の自由 *The freedom of the sea* といふ思想は、海權のそれと同じく希臘羅馬の古へに起源し、和蘭の碩學グロチユス *Grotius* を以つてその近代の始祖とする。海洋の自由は海權の對稱である。一方が海權の存在を主張すれば、同時に他方に於いて、これに對して海洋の自由を高調するに至るのは、理の當に然かるべきところである。前にも述べた通り、元來いづれの民族に對しても一様に解放せられ、解放せられることによりて甲乙なく公平にその利益に均霑すべき性質の海洋を、たとひ一時たりとも暴力を以つて閉鎖し、これをその絶對支配の下に置かうとするのであるから、そこに種種の苦情が起るのに何んの不審はない。海權對海洋自由の問題は、見方によつては富強國と貧弱國の争點でもあり、また交戰國と中立國の論議の中心でもある。世界の海軍國は例外なしに當初海賊國として出發したことは、誰もが周知の事柄である。少くも中世紀までは海賊は海軍の異名と看做さるべきであつた。西歐

海洋の自由
とは中立
國の義務
である。

諸國は政策上いづれも申合はせたやうに海賊を利用するといふよりか、寧ろ極力これを保護獎勵して暴利を貪る爲に、他國の海賊を驅逐し交通の安全を圖るのを眼目として、海洋の閉鎖即ち領土主權の海洋に於ける延長の傾向を馴致せしめた。さうして、コロムブスの西大陸發見となり、ヴァスコデガマの喜望峰迂回となり、一時東西兩洋を西班牙と葡萄牙に瓜分して領有するの觀を呈するに及んで、遂にその頂上に達した。しかし、物極まれば必らず變ずの譬に洩れず、この状態は却つて海洋自由説の實現を促進し、その結果いづれ劣らぬ閉鎖主義の斷行國をして、その領海の範圍を漸次縮少して三哩以内に減退せしめ、爰に始めて三哩以外は何國にも屬せぬ公海制度の確立を見るに至つた次第である。それゆゑ、海賊の嫌疑を受けた場合とか、一國の内亂を幫助した場合とかいふ特例はいざ知らず、今日は最早平時に於いて海洋の自由を主張すべき何等の理由もない。この問題がひとり戦時に於いてのみ特にその意義を有することは、言ふを俟たぬところである。即ち海洋の自由

とは公海に於ける一般航海及通商の自由を指したもので、専ら中立國の權利義務に關する事柄に他ならない。中立國の權利義務に關しては、一八五六年の巴里宣言一九〇九年の倫敦宣言及一九一四年八月の大戦勃發當時に於ける同宣言の補修によつて明かなる通り、大體封鎖衝破中立違反禁制品搭載交戦區域及水雷敷設面の通過などの場合を除くの外、何等の拘束を受くべき謂はれないのである。ところで、一九一五年二月獨逸が恐怖政策を標榜して、嘗に中立財産を尊重せぬばかりか、その人命をも顧慮することなく、潜水艇戰を以つてする正規拿捕の爲めの無差別破壊を實施したるに始まり、英國はこれが報復政策を口實としてランカシヤ工業逼迫の當時を忘却し、一九一六年七月會つて自國の産業原料保護の目的を以つてした提案を含む倫敦宣言をも破棄し、對敵通商の禁止を極端に適用して、獨逸と同様の暴舉に出でて俾らざるに至つた。これに對しては勿論大戦中より米國を首め和蘭・丁抹・瑞典・諸威諸國の輿論沸騰し、殊に米國と英國の關係は一時危機に瀕したほどであ

つた。さうして一九二二年二月の華盛頓條約に於いて、日英米佛伊五個國の間に、潜水艦の攻撃は海戦法規に準據することとし、人命を救助し得ぬ場合は商船の攻撃を断念すべき規定を見たに止まり、一方問題の臨檢搜索權には毫も觸れるところがなかつた。交戦國の臨檢搜索權に對して時間と方法の制限もなく、また理由なき留置や不當の遲滯などに對して賠償の義務もない、といふことは正しく海戦法規の缺陷であつて、これが爲め中立國の蒙むる迷惑は相當に大きい。それは扱て置き、海洋の自由とは西班牙の制海權に對する和蘭の通商自由の主張に出發し、大戰中英獨兩國の交戦權の不行使に刺戟せられて、中立諸國がその中立權擁護の爲に高調するに及んで、遍ねく人口に親炙せられるやうになつたことである。さうして、今日のところ明かに軍事補助となるべき正式封鎖衝破と、絶對禁制品搭載の場合を除く一切の公海臨檢搜索權を廢止し、作戦行動の自由に限り海權の存在を承認するを以つて、その内容とする理想論に止まるが、われわれは正義人道の立場より、そ

の精神は飽くまでこれを尊重せなければならぬ義務があると思ふ。

*This much is certain, that he that command of the sea is at great liberty and may take as much as little of the war as he will.

The vantage of strength at sea, is great because the wealth of both Indies seems, in great part, but an accessory to the command of the sea.

—Lord Francis Bacon.

*Whoever commands the sea commands the trade; whoever commands the riches of the world, and consequently the world itself.

—Sir Walter Raleigh.

戦争の手段は三者いづれを擇ぶべきか

米國の東洋進出組織は、巴奈馬より布哇グアムを経て比律賓へと、支那の中腹を狙つてその猿轡を伸ばし、有事の日直ちにわが海權の急所を握まうと

する勢を示めしてゐる。日本は米國の手が愈大陸の一角に懸かると見れば、それより先きに逸早くその狼臂を拂ひ除けて、海權の急所を掴まれぬやうにせなければならぬ。その海權の急所はどこそこが、われわれ國民としては非心得ておく必要がある。

わが環海に於ける海權の急所はどこか。

實を言ふと、わが島帝國は四面到るところ海權の急所を有する。しかし、或る一國の手に掴まされると忽ち死命にも關する、といった急所のうちの急所は素より數へるほどしかない、例へば、人體の急所が眉間喉首脇胸小手脛と凡そ極まつたもののやうに。今少し具體的に言へば、わが環海に於ける海權の急所 *Critical points of the mastery of the sea* は

- 一、重要航路の焦點を制扼する樞要地區
 - 一、對手國の前進根據地より航線距離内に在る海上要塞地區
 - 一、海峡又は重要水路に跨る海岸要塞及防禦海面の總蔽地區
- の三通りに別かれる。香港新嘉坡南洋濠洲印度歐洲各航路の焦點を制扼する

澎湖島を首め、炭水を再び積込むことなくして到達し得べき、グアム比律賓よりの航線距離内に位する、奄美大島及小笠原島などの海上要塞地區は、第一及第二項の双方に當り、また朝鮮滿洲北支那琉球臺灣上海各航路の焦點を制扼する長崎及佐世防禦海面地區や、關門及對馬要塞地區を含む朝鮮海峡、豊後水道紀淡海峡津輕海峡などの海岸要塞地區は第三項に當る。われわれは環海到るところ急所を有するからといつて、どこから衝かれても安心なやうにわが國防組織を防水區劃に仕切つて、どこの民族も一切寄せつけまいとするほど神經過敏ではない。ただ富強に任かせて法外の野心を起し兼ねぬ或る一國に對して、間逆の場合前記の第一第二項の地區が、その掌の裡に落ちぬやうに用心を仕て置けば済む道理である。第三項の地區はそこまで敵を寄せつけては日本もお仕舞であるから、暫らく預りとする。

小笠原島に敵が泊れば、帝都はその爆撃機隊の下に曝露せられ、阪神との交通はその快速艦や潜水艦の侵寇を受ける。更に奄美大島に敵が寄せれば、

琉球・臺灣との領土の聯絡は遮断せられ、上海・北支那各航路は閉塞し、九州中國關西の工業都市は空中攻撃を免かれない。縦しんば澎湖島が敵手に落ちたしてからが、わが海外貿易の杜絶によつて被むる經濟的打撃が果していかにかりか、想像に餘りあるであらう。今これを逆に考へれば、わが邦がこれら環海の急所を掌握するうちは、臺灣海峡以北に於ける最小限度の、國防圈内の海陸聯絡の安全を期し得るのみならず、尙これに伴隨する副現象として、交戦權行使の自由をも比較的容易に確保し得られる道理である。そこで海戦の様式として凡そ三通りあることが想定せられる。一は海權の爭奪戦であり、二は入寇戦であり、三は貿易破壊戦である。さうして、海權の爭奪戦に勝利を博すれば、公海使用の自由はその手中に歸し、その結果は作戦上對手國をして自國の意圖に追従するの止むなきに至らしめ、空中及海上よりする大規模の入寇を決行するにも、また進んで敵の交通遮断に従事するにも、比較的有利の立場に在るを得るのである。

戦争はいふまでもなく威力行爲である。組織的破壊である。さうして、その目的とするところは、對手國の抵抗力を摧破することにより、對手國をして自國の意志に屈伏せしめるに在る。これを達成する手段には種種あるが、要は、對手國の國民精神をして沮喪せしめるか、その經濟生活をして破壊せしめるか、それとも又その軍事組織をして潰亂せしめるかの三通りを出ぬことは明かである。一國の軍事組織が整然としてゐて、外敵の侵入を禦ぐに足る實力があつたとしても、これが支柱たるべき國民精神が一たび沮喪すれば、決戦を見るに及ばずして敗形既に成るといはなければならぬ。左なきだに肉體と精神兩方面の刺戟により、不安と疑惧の念に満たされてゐる戦時の民心に、敵機の去來敵艦の出沒がいかに甚深の衝動を與へるかば、實にわれわれの想像の他である。更にそれよりも一層戦慄すべきは思想の宣傳である。世界大戰に當り、英國情報局宣傳部の活動が、埃匈國の戦意を挫折せしめて中欧同盟より脱退し、延ひて獨逸の戦争繼續を困難ならしめ、尙引續き

西部戦線を越えて獨逸の輿論を撓亂することにより、妥協的平和に誘導せしめたことは誰もが周知の通りである。更にそれよりも顯著なる事例は、レーニンを瑞西（フィンランド）より解放して本國に送還せしめた結果、露國をその戦線の背後より崩壊せしめ、次いで歐亞に跨る一大帝國をして革命の渦中に投じ、終にロマノフ朝廷をして俄然大木が倒れるやうな最後を遂げしめたことである。思想の宣傳と海上及空中よりする入寇は、何人の豫想よりも遂に極めて有効なる戦争の手段であることは、大戦の教訓によつて明かにせられた。しかし、思想の宣傳戦は愛にこれを論ずべき限りではない。次に、一國の國民精神が終始毫も沮喪することなく、能くその軍事組織を支持し得たとしても、適これが培基たるべき經濟生活に破綻を來たせば、到底永くその抵抗を繼續するを得ぬことは言ふまでもあるまい。單に開戦といふ聲を聞いてさへ財界の恐慌が尋常でないのに、一朝海外との交通が全然杜絶したとしたならどうである。列國が持ちつ持たれつで世界經濟圏を構成する現代の資本組織を以つて

封鎖の作戦は、どの國にも一律に有効でない。

しては、所詮その久しきに堪へ得ぬことは知れ切つてゐる。獨逸が大陸に國して民に勤儉の風があり、政府も亦深く慮るところあつて、自給の計を究めざるはなく盡さざるはなき概があつたに拘はらず、遂に降を敵の軍門に容るの止むなきに至つたことは、何より雄辯な證據ではないか。左すれば經濟封鎖も亦戦争の手段として極めて有効であるには相違ない。そこで、人と物の限りを傾け盡くして従事する現代戦争の本質上、壯烈を極むる兵力の闘争は封建時代の名残りとして鐵にその跡を留め、饑餓政策や恐怖政策がこれに代つて、流血の惨劇を演ずることなしに所期の目的を貫徹し得べき、新規の而かも價值ある手段として、専ら採用せられるに至るであらう、と観測する氣速の人達もある。世界大戦の結果だけからすれば一應は尤も千萬である。しかし、英國が獨逸に對して行つて偉功を奏したからといつて、封鎖作戦はどの國に對しても一律に有効である、との結論は生まれない。空中攻撃にせよ、貿易破壊にせよ、同様である。これらの恐怖政策や饑餓政策の可能性

は、主として交戦國間の領土の地理的事情に左右せられる問題であつて、隨つて、互に接壤又は一帯帯水の關係に立ち、而かも一國獨立して自給自足の經濟圏を成し得ぬ西歐列強間の事例を唯一の標準として、斷定し得ぬ理由があることを知らなければならぬ。そのみならず、戰爭の秘訣は戰局をして出來得る限り短時日内に終結せしむるに如くはなく、それには戰爭の範圍を敵對國間に極限して、成るべく速に勝敗を決する手段を講ずるより他はないが、遺憾ながら、叙上の手段はいづれもこの要求に應ずべく餘りに緩漫であり、悠長に過ぐる嫌ひがある。言換へれば、叙上の手段はどれ一つ長年月を要する事柄——時日の経過に伴れて漸次その効果を奏すべき事柄でないものはない。それゆゑ、兎角する間に外は勢ひ第三國の干渉または參戰を誘致せぬ限りはなく、その結果として徒らに戰局を擴大して拾收し難きに至り、爲に交戦國の行動を拘束して、その追求する最大の戰果を獲べき期待に遠ざからしめる憂ひがあるばかりか、内は民心の倦怠を招き易からしめ、その極

往往にして不祥の事態をも惹起し、敵を殲すに先つて自ら潰える虞れがないともいへない。世界大戰は結局獨逸の屈伏に終つたにもせよ、獨逸は四面包圍の裡に五年四個月の久しきに涉り、能くその經濟上の壓迫に堪へ得たのみならず、軍事上に於いては聯合軍こそ却つてその備ますところとなつて危機に瀕し、環視圖をして手に汗を握らしめたことは一再でない。最後に聯合軍がどうやら勝つた時には、へどへどに疲れ切つて了つて、その復興振りさへ負けた側の獨逸と較べて、餘り衰められた義理でもない状態ではないか。また蘇聯邦は世界中から經濟斷交を食つて殆んど孤立無援に陥つたに拘はらず、毫もその赤化宣傳の信條を顧へすことなく、今尙國際常軌を著しく逸した行動を改める模様が見えぬではないか。米國が同様の立場に置かれたと假定してからも、恐らくその屈伏を強制することは困難であらう。否その他の國國にしてからが、國民の碧血の最後の一滴財寶の最後の一錢の盡きるまで、惡戰苦闘を辭せぬ覺悟を極めた段には、叙上の安全にして而かも穩當と信ぜられる

手段に果して幾何の期待を繋ぎ得べきや、頗る疑問であるといはなければならぬ。一步を譲つてたとひ多大の期待を繋ぎ得たにせよ、その結果は所詮銃剣の先きによつて獲得せらるべき、光榮ある勝利のそれに比すべくもないことは、われわれの牢記して断じて忘れてはならぬところである。そこで、戦争の唯一の有力なる決定的手段としては、ひとり兵力の闘争あるのみ、と切言せざるを得ない。兵力の闘争は實に他の迂遠極まる微温的手段に出るよりも、神速また簡潔を尙ぶ戦争の秘訣に合致する點に於いて、遙に價值もあれば意義もある。何故かなら、敵の軍事組織だに潰亂せしめれば、その國民精神並に經濟生活の何狀たるを問はず、敵をして無抵抗の狀態に置かしめることを得て、おのれの追求するいかなる目的を敵に強制するにも、全然自由であり、さうして敵の軍事組織を潰亂せしめるには、その現に擁する建設軍 *Established force* を減滅するを以つて足れりとべく、その手段は兵力の闘争を措いて他にないからである。

かくいへばとて、一國がその敵國を屈伏せしめる爲め、宣傳となく、入寇となく、封鎖となく、將た又戦闘となく、凡そ有効と認められる有らゆる手段を取るべきは素より理の當然であつて、苟しくも情況の許す限りこれらの手段を同時に行ふを躊躇すべき謂はれない。のみならず、これらの手段は互に相俟つて愈益その効果を奏すべきことは更に疑ひないのであるが、ただ、われわれがいづれに重きを置くべきかを擇ぶ場合には、何は擱き後者に全力を傾倒せなければならぬ、と主張するまでの分である。宣傳といひ、入寇といひ、封鎖といひ、いづれも兵力の闘争があつての上のことであるので、兵力の闘争を抜きにして、これら各個の遂行が果してどれほどの成績を挙げ得るものか、頗る怪しい種みである。戦争を有効に決定するものは、兵力の闘争を除いて他に何物も有る道理はない。戦闘は實に戦争の他の一切の手段を省略し、他の一切の手段よりも勝敗を一氣に決するに適當にして十分なる、直截端的手段であることは誰しも恐らく異議のないところであらう。この

スカパロの日は最
後の日か抑も何に
か基因するに

見地に立つて論断すれば、獨逸がその對英作戰に當つて終始艦隊戰闘を回避して故ら深海封鎖を選定したことは、スカパロの最後の日を誘致した抑もの素因である、と極言して敢へて誇張でないと思ふ。萬一獨逸が當時尙建造中であつた戦艦及巡洋艦を急遽竣工せしめ、これらの新勢力を合して進んで決戦を求めると方針に出たとしたなら、ジェットランド海戦以前にもその好機は一再ならず有つた筈で、その結果は勝利を期待する多分さを缺ぐことに或は變りがなかつたにせよ、敵に至甚の損害を與へて、その講和條件を遂に輕減し得たに相違ない。この觀測はジェットランド海戦の實績に徴しても大した的外れの見當でないのであるが、惜しいかな、チルピッツ提督以下幹部の多数は新兵器の威力を過信する餘り、すべてを犠牲として徹頭徹尾餓餓政策への執着を去り得なかつた。勢力の保存といふ誤まつた消極方針が、カイゼルの海軍に觸ひしたことは實に夥だしいものである。われわれはたとひどんな事情や口實があらうとも、國家非常の場合に際して兵力の闘争を回避す

るほど不純非理且また未練はない、と主張するを憚らぬものである。廣い世間には、兵力の闘争は人類の屠殺以外の何物でもなく、酸鼻の極みであるから成るべくこれを回避して、同じ戦争をするにしても他の穩當な手段を擇ぶが可い、と思ふものがあらうも知れない。しかし、それは空中戦や、潜水艇戦や、涸血作戦が、戦闘員たる軍人以外のいはゆる平和的人民を男女老幼となく、より一層慘酷なる運命に陥れる所以であることを察せぬからである。この意味に於いて、兵力の闘争を回避するのは不純非理未練の譏りがある上に、結句正義人道の精神にも悖るものと斷ぜなければならぬ。

前にも述べた通り、敵の軍事組織を潰亂せしめるには、その現有する建設軍を殲滅すれば足りるのである。その建設軍は何を指すかといへば、陸軍では常備軍を基幹として、これに豫後備軍國民軍義勇軍などを臨時必要に應じて編入した野戦軍であつて、それは機動戦によつて勝敗が決せられ、海軍では常備艦隊を主力として、これに海上部隊の全部を擧つて隸屬せしめた、い

はゆる聯合艦隊そのものに他ならぬのであつて、それは艦隊戦闘によつて勝敗が決せられる。いふまでもなく、大陸國間の戦争では陸軍が仕手であつて、海軍は單にその協師を勤めるに過ぎない。海軍がいかに優勢にもせよ、精精巧く行つて牽制の目的を達すれば大成功のうちであるが、先づ敵の沿岸を封鎖し、その要地に入寇して損害を與へるくらゐが關の山。一八七〇年の普佛戦争に於いて、佛國海軍はその期待せられたる有らゆる努力を盡くしたに拘はらず、その効果は機に敵港を閉塞して自國の海路を開通し、その北岸に於ける敵の上陸を不能ならしめたに止まり、毫も敵の侵入軍を妨碍して、戦局を左右するほどのことを成し得なかつた。また世界大戰に際して、土耳其と巴爾幹諸邦の交戦に於ける希臘海軍の活動も、何等その大勢を制するに足らなかつたし、獨逸海軍の露國に對するポールチック沿海の優越權も亦同様の觀を免かれなかつた。海上作戦は交戦國の一方が少くも海洋國の場合に於いて、爰にその喫緊性を認められることは、多くの辯を費すまでもあるまい。

即ちこの場合に在りては陸軍は協師の役に廻り、海軍が専ら仕手として立つのである。しかし、叙上はどこまでも主客の位置を説明するだけのことであつて、これを標準として輕重の關係を論斷せんとするものではない。殊に我邦のやうに領土の一部を以つて大陸と接壤する陸島國に於いて、海陸軍の間に輕重の別を立て得べき道理はない。陸海軍は諺に言ふ車の兩輪鳥の双翼と同様、二者互に相俟つて國防の十全を期すべく、その協同作戦が戦争の經過とその効果にかばかり重大の影響を及ぼすものかは、日清日露兩役の教訓によつて誰もが先刻承知のことであらうから、誤解は有るまいと思ふが尙念の爲め一言しておく。それは左に右として、大陸國間の戦争に在りては、互にその國境線の突破を切掛けとして展開せられる、野戦軍の機動戦によつて輸贏が決するのであるから、事は比較的單純な道理であるが、一たび大陸國對海洋國が干戈を交える段となると、何分海上を隔ててのことであるので、攻防共に勢ひ複雑に涉らざるを得ない。しかし、いづれにしても、敵の領土

敵の侵入は、
決定し得る
勝利の
数を得る

への侵入が戦争の秘訣であることだけは言ひ得られる。

敵國への侵入 Invasion of the enemy's country. は單なる國境線に縁ふ監視兵の塙壁を越えて成されると、遠く大洋を隔てて成される別こそあれ、本質的にはそこに何等の違ひもない。ただ大陸國對海洋國の戦争に於いて、後者側がその主力艦隊の惨敗を招いた時、戦争の繼續を徒勞としてひたすら講和の成立を急ぐ場合を想定せられぬでもないが、それは論外として、たとひ大陸國ならすとも、陸軍の儼存する限り容易に降伏を肯ぜざるべきは理の見易きところであるから、侵入は寧ろ戦争の必要條件であるといつても穴勝ち過當ではなからう。いかなる場合たるを問はず、敵の兵力を撃破し、その領土を占領し、その資源を管理し、その政府を監督下に置くを得れば、多大の成果を收めて戦局の終結を見るべきことは蓋し疑を容れない。即ち成功せる侵入は勝敗の數を決定するを得るのである。一步を譲つて縱しや白佛戦線に於ける聯合軍のやうに、被侵入國の野戦軍が久しきに亘る惡戰苦闘の後、敵を撃攘し

て再びこれを國外に驅逐し得たに似たところで、その侵入を被つた地方の荒廢産業の全滅住民の愁苦など、兵火の名狀し難い慘禍は到底これをいかんともする術もないであらう。現に白佛戰場は未だにその恢復の遲遅たるを旅行者によつて傳へられてゐる。これらの災害は實に侵入と不可分の現象でなければならぬ。かく言へば人或は反問するであらう、獨逸は白佛の侵入に成功したが、あの結果を見たではないかと。いかにも獨逸は九叙の功を一箕に虧いで、結局屈服の他なきに至つたに違ひない。しかし、その白佛の侵入は決して徒事には終らなかつた。獨逸が終始その戦線を國外に維持して奮闘大に力め、敵をして一步だにその境内に入らしめなかつたからこそ、その今日があるのである。もしさうでなかつたとしたなら、あの苛酷な妥協的講和をすら成立せしめ得なかつたであらう。侵入が戦争の秘訣であることに誰しも異議はない筈である。そんなら、敵地への侵入に成功するにはいかにすべきか。海洋を隔ててかかる政略作戰を敵の領域に實施するには、是非共優越な

る艦隊によらなければならぬことは、贅するまでもあるまい。何故かなら、侵入軍は敵の主力艦隊を撃滅してこれをその海上より掃蕩し、若しくはこれをその港内に閉息せしめ、その水上及水中艦艇の奇襲に對して交通の安全を獲得し、尙進んで敵の沿岸防禦及機雷敷設面を突破して海陸聯絡を確保した後でなければ、その揚陸作業に着手することを得ぬからである。今假りに敵地へ侵入すべき兵力を十萬とすれば、これが輸送に従事する特務艦は、わが歐米航路を往復するやうな大型の船舶で少くも五十隻を要するであらう。かかる一大縦列を伴隨する侵入艦隊が、敵の目を掠めてその領域に接到し得ようとは、いかにしても考へられない。先づその姿が海面に現はれると、豫ねてさうもあらうかと哨戒の網を擴げて待ち構へた敵の驅逐艦が、忽ちこれを發見してよもや遁がしつこはあるまい。よしやその網目は巧く潜り抜けたとしても、次には偵察艦が哨戒線を張つて控えてゐようといふもの、これは艦隊の耳目といはれるだけに鳥渡煩るさい。しかし、そこもどうやら通り

越して辛つと敵の領海へ入つたかと思ふと、今度は藻の一片でも流れて來れば眼を外らさぬほどの監視振りで、晝夜となく巡邏してゐる沿岸防備の驅逐艦や、潜水艦の細かい哨戒の網にぶつかると、敵がいかにうっかりしてゐれば、とて、この三段の構へを無事に潜つてそつと敵地へ乗込まうなどいふ藝當は、潜水艦や、飛行機や、無線電信のなかつた、百二三十年前のむかしならいざ知らず、やがて二十一世紀を迎へる今日では所詮出來ぬ相談。哨艦の網に掛かれば逸早く後方に通報するに違ひないから、時を移さず敵の艦隊が操出して來て、そこで海戦が始まる。さうすれば、侵入艦隊は運送船といふ豪らい厄介物を伴れてゐるだけに、それが足手纏ひとなつて請合つて惨敗するに極まつてゐる。それであるから、敵地への攻撃作戦には徒らに潜水艦や驅逐艦の餌食となるやうな、そんな厄介物は一切伴れず、侵入艦隊は先づ敵の主力を撃破つてその通路を開く必要がある。それからでないと、侵入の成功は勿論大規模の貿易破壊戦や、牽制又は單なる威嚇を目的とする有力なる入寇戦

を企圖しても、思ふほどの成績を擧げることが到底覺束ないのである。

索敵と封鎖は同一の作戰目的を有する

海戦は海權の爭奪を以つて開始せられる。さうして、互に相對抗する彼我兩艦隊の作戰行動は、攻防共にその揆を一にする。言換へれば双方が互に本隊の所在を突止め、その優越なる勢力を集中して戰術運動の巧妙さにより敵を壓迫し、これを避け難き決戦に導き、以つて勝利を博せんとする要旨に變りはないのである。それゆゑ、海戦は勢ひ數期に分かれる。即ち索敵封鎖奇襲主力戰追擊戰並に戰勝後に於ける制海權の實施のそれである。これらの各戰期は事實上別段階をなしてゐるから、各期毎にその作戰行動を異にするはいふまでもないが、ただ爰に牢記すべきは、これら各戰期を通じて終始一貫せる攻撃精神を以つて、偏に當初の目的に向つて勇往邁進するものの中に、全勝の榮冠が歸することである。

艦隊戰闘
の角力
は四
つと
つと
どの
の術
がで

兵語に「敵を掴んでこれを撃つ」といふことがある。陸戦も海戦も要領は同じである。放れては相撲にならない。艦隊戰闘はいはば横綱同志の角力、是非四つに渡つて堂堂と勝負をつけべきものである。ただ、しかし、幾ら堂堂と勝負をつけるといつても、矢鱈滅法に土俵へ上るとなり突如飛付く莫迦はぬまい。双方見合はすうち阿吽の呼吸を計つて、びつたり合つたとなれば、そこで始めて猛然と立上つて打つかる。双方見合はすうちに實は相手の虚實を讀むわけである。艦隊戰闘もこの理に他ならない。敵を掴むには先づ掴むだけの手順を運ばなければならぬ。その手順には凡そ二通りが數へられる、一は索敵行動 *Scouting Movement* であり、一は軍事封鎖 *Military Blockade* である。兩者は鳥渡考へると全く違つた作戰行動のやうであるが、その實決してさうでない。豫定せられた位置に於いて敵と緊密の接觸を保つのと、豫定せられぬ位置に於いて敵と緊密の接觸を保つ違ひがあるだけのこと、敵を壓迫して戰闘を強制する目的に至つては一である。互に相對抗する二の艦隊をして

避け難き戦闘に導かしむる手段として、われわれは軍事封鎖と索敵行動を數へることが出来る。敵と緊密の接觸を保つことは取りも直さず敵を掴むことである。今更ながら海は潤い。幾ら大艦隊が數十哩を蔽ふて押寄せようと、潤い海から見れば鱈の群れほどにも當るまい。今假りに日米間の雲行が怪しくなつて太平洋の波を湧かすとする。米國艦隊がどこをどうして来るものか、五千哩幅七千哩丈の廣海面を捜し廻つて、鱈の群れを突止めるのは骨であらう、と思ふものがあらうも知れない。いかにも軍艦には商船のやうにちやんと極まつた航路といふものがないのは事實である。しかし、そこは蛇の道は何んとやら。斯道の人が敵めば凡その見當は付かうといふもの、何んば軍艦に極まつた航路がないにもせよ、さう矢鱈とどこからでもやつて來られる道理のものではない。米國艦隊が太西太平洋兩洋に分かれてをる以上、巴拿馬運河は是非共通する。それから加州で勢揃へをするものか、それとも布哇で落合ふ手筈にするものか、そこまでは確乎と判らぬが、一度は眞珠灣に繋ること

だけは請合ひである。さうして、多分豫ねての筋書通り、グアム比律賓へとその東洋進出組織を傳つて來るに違ひない。斯道の人でなくともそれくらゐの見當はつく。その眞珠灣を抜錨するまでの情勢は、わが諜報機關によつて逐一霞ヶ關の海軍省に打電せられるから、手に取るやうに判る道理であるが、爾後の消息は一に索敵行動の結果に須つてこれを知るの他はない。

索敵行動は追跡 *Shadowing* と偵察 *Bouting* の二通りに分かれる。追跡は尾行である。敵の影を見失はぬやうに見え隠れにどこまでもその跡を尾けて、敵の消息に就いて搜り得たところを本隊に知らすのがその役目であるから、性質上航續力のある快速の偵察艦が専らこれに服することはいふまでもない。しかし、ただ跡を尾けるだけでは敵を確乎掴んだとはいへず、随つてその虚實も判然しようがない。そこで、是非共偵察の必要が起る。偵察は一種の張込みに他ならない。角袖が非常線に掛かつた曲者を本署に揚げるやうに、敵の正體を掴むまで搜索列を擴げて行き、掴んだが最後、愈その處分方を本隊

索敵行動
は追跡と
偵察に分
かれる。

に引續がぬうちは、抑へて放さぬやうにするのがその役目である。それゆゑ、偵察艦だけでは手薄であるから、前に驅逐艦を配り、後に一等巡洋艦や巡洋戦艦を控へ、二段三段の構へをして、緩急に應じ得られるやうな有力な戦隊を編成する。追跡は主として國交斷絶即時より開戦の初頭に涉つて行はれ、爾後専ら偵察の期間に入り、かくて艦隊戦闘の序幕は切つて落されるのである。

敵と緊密の接觸を保つてこれを避け難き戦闘に導くべき、他の手段として數へられる軍事封鎖は、誰もが知る通り經濟封鎖の對稱であつて、一種の奇襲 *ambush* にならぬ。即ちその目的とするところは、要するに敵の不意に乗じてその虚を衝き、以つて奇勝を博せんとするもので、概して開戦の初頭に於いて行はれる。日露戦役當時、わが聯合艦隊が敵の東洋艦隊を旅順に閉塞したのはその顯著なる實例であつて、敵の集中を終らぬ先きにその分割せられたる勢力に對して攻撃を斷行し、これに甚大の損害を與へること

軍事封鎖
は一種の
奇襲に他
ならぬ

得をれば、それは取りも直さず各個擊破の端緒を開くもので、戰略上の大成功である。國際法の形式論からすれば、軍事封鎖と經濟封鎖はこれを一括して齊しく交戦國の一方が他の一方の領域、またその占領する港灣及海岸に對して監視線を展張し、兵力を以つてこれを維持するの謂ひである、と解釋して差支ないのであるが、實質論からすれば斷じて斯かく概説するを容さぬ。何故かなら、經濟封鎖は敵手國の港灣及海岸と外海の交通を實力によつて遮斷するの謂ひで、宣傳入寇戦闘と同じく戦争の手段であるが、軍事封鎖は戦闘の手段で、その目的を異にするからである。軍事封鎖はたとへばわが青島攻略のやうな陸戦の合圍と同じく、敵の據點を奪取する手段として實施せられる場合を含むことはいふまでもないが、それは論ずる限りではない。封鎖點を中心として展張する監視線が、互に相對抗する艦隊の決戦を避け難からしめるやうな確實な聯絡を保つとき、われわれはこれを軍事封鎖と名ける。軍事封鎖は艦隊戦闘の豫備手段として、敵の艦隊と緊密の接觸を保つのがそ

の唯一また全部の目的である。一般には、優勢なる海軍力を以つて監視線を維持する事により、終始敵の艦隊を港内深く潜伏するの己むなきに至らしめたなら、封鎖の目的は完全に達成せられたものと信ぜられてゐるやうである。しかし、それは適敵をして安全にその勢力を保存せしめるに止まり、身方はいつまでもその勢力を分割して監視を継続せなければならぬので、他の新しい任務に服することも出来ず、旁以つて頗る多大の拘束を受ける事情を察せぬからである。軍事封鎖は壯烈なる戦闘を交えず、多大の損害を蒙むることなしに海権を獲得する所以であるかに解釋して、敵の艦隊の行動を監視し、その脱出を阻止するに足るべき十分の兵力を適當に配備する一切の方法と速断するものがありとすれば、大きな間違ひである。軍事封鎖はその形式から言へば、敵をその港内に閉塞して外海との交通を遮断する、方法のやうに思はれぬでもないが、その實質は寧ろ敵をその錨地に威壓して、敵がその威壓に堪へ切らず、運命を賭して出動するの餘儀なきに至らしめる手段に他なら

ない。穴狩に喩へれば、張込みの目的が狩出しに在ると同じ道理である。それゆゑ、監視を極端に厲行して、敵の一艦一艇たりとも、わが哨幕を掠めて逃走せしめぬやうにするなどいふことは、管に無用の業であるばかりでなくまた實際に於いて不能である。軍事封鎖は敵の個々の戦闘單位の行動を目標とするものではなくて、その編成する整然たる組織體に對して戦闘を強制するに在る。いかに緊張した而かも嚴密な哨幕にせよ、敵の艦艇の單獨脱出を到底阻止するに足らぬことは理の見易きところで、最近に於ける潜航技術の發達は殊にその然かるべきを思はしめる。現に大戰中、獨逸海軍は幾多の勇敢なる封鎖逸走者を出したことは誰もが知る通りである。しかし、この一事を以つて英國海軍の無能を護るものは、畢竟封鎖の何たるを會得せぬからであつて、素より取るに足らない。

軍事封鎖はその方法によつてこれを海面封鎖 *Open Sea Blockade* と深海封鎖 *Deep Sea Blockade* に別ける。前者は水上艦艇によつて實施せられ、後者は潜水艦艇

によつて實施せられる。勿論、獨逸の對英潜水艇戦は國際法上のいはゆる報復手段であつて、經濟封鎖と軍事封鎖のいづれでもないであらう。しかし、われわれはそれを唯一の論據として、現在及將來に於ける水中艦艇による、深海封鎖の可能性を否定することを得ない。大戰このかた潜水艇が目覚ましい進歩を遂げたことは争ひ難いといへ、水上艦艇のやうに戰略及戰術の要求に副ふ、整然たる一隊を編成し得る程度に達せぬことは、遺憾ながら今尙事實として承認せぬわけにはゆかない。それは確に潜水艇の缺點である。ただその缺點あるが爲めに深海作戰の實施を不能とする理由はないのである。封鎖の條件としていはゆる紙上封鎖 *Paper Blockade* に堅せぬやうに、適當の兵力を以つて監視線を維持する必要があるにしても、封鎖艦隊が絶えず封鎖面を遊弋する必要はない。敵艦隊の突出に備へる爲に、その封鎖面に近く根據地を假設して、そこに主力を集中し、封鎖面には若干の艦艇を留めて監視に當らしめる。これが一般の原則である。それには潜水艇は監視艦として立派に

潜水艇は深
海に封鎖を
能はす
ない。

役立つ。否、空中及水中攻撃に對する危険の顧慮からいへば、水上艦よりも寧ろ潜水艇の方が優れてゐるのではないか、とさへ思はれるくらゐである。いづれにしても監視艦だけで實施するわけではないのであるから、適當の兵力を缺ぐといふ唯一の理由で、深海作戰を封鎖方法として採用するに足らぬとは斷定せられない。外海との交通を絶對に遮斷し得る場合に限り、封鎖は適法であるといふ理論に立脚せぬ以上、經濟封鎖に在つては尙更である。深海封鎖は獨逸が對英報復手段として、始めてこれを經濟封鎖に採用したのを以つて嚆矢とする。これに反して、海面封鎖はこれまで軍事封鎖と經濟封鎖のいづれの場合にも採用せられた普通の方法で、封鎖點と監視線の距離のいかんによつて近接封鎖 *Clos Blockade* と遠隔封鎖 *Indirect blockade* に分かれる。この區別は畢竟封鎖點に於ける地形と、封鎖點と根據地との距離によつて決定せらるべき實際問題であるから、素より一定の標準とてはないが、要は敵に戰闘を強制し得るを以つて程度とする。公法の原則として封鎖の設定は宣言に據

近接封鎖
の遠隔封鎖
は、一に利害
の形に地につ
ら決定せらる。

る。これを正式封鎖 Legal Blockade といふ。経済封鎖は正式封鎖であつて、設定の宣言を須つて始めて成立する。しかし、軍事封鎖は穴勝ち宣言の必要はない。何故かなら、前者は政略上中立國の權利を尊重する趣旨に出たものに他ならぬが、後者は純然たる作戦行動に係はり、所詮第三國の意圖を斟酌する暇がないからである。大戦中英國は北海全部を擧げて臨戦區域となし、北海より丁抹海峡に至る近接封鎖を避けて、ドヴァー海峡と扼守する、と同時に蘇格蘭の北方海面を監視する遠隔封鎖を選び、一は以つて敵の大海艦隊の遠航に備へ、一は以つてその海外貿易の遮断を期したのであつた。英國は北海の封鎖を宣言しなかつた。それゆゑ、理論上よりいへば、中立國は公法の保障により獨逸と自由に貿易の關係を繼續するを得た道理である。しかし、通航船舶は英國の臨檢搜索權に服して、中立の義務を負はなければならなかつたので、事實上北海は正式封鎖の設定を見たのと何んの擇ぶところはなかつた。詰まり英國は軍事封鎖の名の下に、経済封鎖の實を收め得たのであつた。

英國の遠隔封鎖は主として北海の地形と、敵地に近くその前進根據地を獲得する困難に鑑みた結果に外ならぬのであつて、勢ひ己むを得なかつたにもせよ、敵に對して戰鬪を強制するに足るべき、戰術的可能性を缺く點に於いて、軍事封鎖として決して成功したものとはいひ難い。獨逸海軍が勢力の保存といふ、謬まれる思想に禍ひせられて終始退嬰自屈に陥つた、と同時に英國海軍は敵に對して六割の優勢を頼みとする、一種の自負心から何等積極手段に出ず、いはゆる沈黙の大海軍の悲哀を感じぬわけにはゆかなかつた。幸にして敵の過誤によりその貿易を杜絶せしめる、意味に於いてはどうやら目的を達したやうであるが、それは怪我の功名といふものであるから、英國の對獨作戰を唯一の教訓として、遠隔封鎖がいつも有利であるやうに思ふのは見當違ひである。尤も警戒方法と通信機關の進歩した今日は、強ひて近接封鎖の危険を冒かさずとも、遠隔封鎖の安全を擇ぶに越したことはないやうなもの、それにしても適切且十分の効果を收めるには、事情の許す限り多少の犠

性は覺悟の上で、是非共前者を實施する決心がなくてはならない。

我邦が一朝干戈を執つて驟然として起つことを餘儀なくせられる場合、對手國となるべき假想敵は、何分わが邦とは渺茫たる大洋を隔ててゐることであるから、斷定的結果を見るのは所詮至難であらうと想はれる。しかし、極東に於ける敵の屬領を逸早くわが手に攻略してその既得勢力を覆へし、尙進んでその遠征艦隊を撃滅すれば、敵はその世界に於ける指導位置を失墜する結果、勢ひ屈伏の他はあるまい。いづれにしても、わが海軍は二十五年前の往時を忘れず、能く機敏の行動に出でて敵の東洋艦隊をその根據地に封鎖し、緒戦に於いて先づその銳氣を挫く必要がある。その際、敵が頽勢を挽回する爲め主力を擧つて更に西航の途に就けば、わが奇襲部隊は、敵がその策源地を遠かるに従ひ必然曝露すべき弱點に乗じてその後方聯絡を攪亂し、またはその伴隨する一大縱列を要撃して、益志氣の沮喪を致さしめることに手抜かりがあらう筈はない。かくて、追跡偵察封鎖奇襲の敢行により敵の機先を制

し、身方に有利の情況を醸成せしめた後、敵の主力を手頃引寄せて仕止める段取となるのである。

海戦は人智と機力を悉くした闘技である

海戦と陸戦の間には共通の原則もあるが、共通でないものもある。一國の安危の由つて敵かれる喫緊の時機と地點に於いて、優越なる兵力を集中する必要があることは、兩者共通の原則であるが、就中海戦に於いては取別けさうである。尤も素敵封鎖奇襲入寇の爲め、その好機とする一定の期間と制限せられた範圍に於いて、一時本隊より派遣せらるべき水雷戦隊や、偵察戦隊の離脱を回避する理由はない。ただ兵力の分割は、各個に撃破せられる危険を孕む惧れがあるから、能ふだけこれを回避して、一國の海軍力は、その全部を同時に使用し得られるやうに一纏めとし、毎にこれを總帥の掌裡に確乎と握つてゐる必要があるといふに止まる。これを急所に於ける兵力集中 The Con-

急所に於ける兵力集中の海軍力は、その全部を同時に使用し得られるやうに一纏めとし、毎にこれを總帥の掌裡に確乎と握つてゐる必要があるといふに止まる。これを急所に於ける兵力集中 The Con-

centration of force (at the critical point) の原則と呼ぶ。海戦に在りては、先づ小部隊の衝突を以つて開始し、豫備隊を後方に控へて緩急に應じ漸次にこれを戦線に増加し、由つて以つて主力間の決勝に推移せしめるやうに、戦闘を指導するといふことは絶対不能であつて、互に相対抗する二の艦隊はその事前の情況のいかんを論せず、双方が是非共攻勢に出なければならぬ。言換へれば、海戦には戦略的攻勢とか戦略的守勢とかいふことはあつても、戦術的守勢といふことは到底考へ得られぬのである。何故かなら、海上に於いては展望が自在であるから、陸上に於けるやうに敵をしてわが兵力又は攻撃方面を誤解せしめ、若しくは敵の砲火に對してわが部隊を掩蔽するやうな地形の利用は、所詮これを期待し得られぬからである。そこで海軍には戦術はあるが戦略はないなどいふものもある。一理あるやうであつて決してさうでない。現に今回の倫敦會議に際して、わが邦が對米七割を主張する論據は抑もどこに在るかを想へ。萬一の場合守勢を取るといふ大方針は、取りも直さず戦略的見地

海戦には
戦術と
攻勢と
守勢と
は、
いふ
べし
な
ら
ぬ
考
へ
ら
れ
に
な
ら
ぬ

から來たものであり、そのまた戦略的見地は七割でも十分國防の安全を期し得られる、といふ戦術的自信に基いたものではないか。海軍にも戦略と戦術の別があることは明かである。戦略 Strategy とは敵と身方が互にその接觸を保つ以前に於ける作戰方法であり、戦術 Tactics とは敵身方が接觸を保つた以後に於ける戦闘の實施方法である。戦略の目的は戦闘の實施に必要な有利の情況を促成するに在る。事後に於ける戦術上の要求は、すべて事前に於ける戦略行動の基礎たるべきものである。いかなる戦略も戦術の可能性なくしては、これを實施することを得ない。即ち戦略は戦術に従たるべきものでなくてはならない。されば、攻守作戰目標の選定陸軍との協同作戰戒嚴及防禦海面令の施行より、出帥準備艦隊集中戦時編成敵前演習追跡偵察奇襲封鎖並にこれに要する兵力の配置及陣形運動に至る、事項はすべて戦略の範圍に屬し、艦隊戰闘貿易破壊入寇戰の實施艦艇兵器の操縱運用將校下士卒の指揮命令並に健康及志氣の保持、などいふ事項はすべて戦術の範圍に屬する。さう

して前者は後者の公算なくしては、所詮その成果を期待することを得ぬのである。

次に指摘すべきは、陸戦に於ける標語の「最後の五分間」は、海戦に於いてはこれを「最初の五分間」と變更せなければならぬことである。「最後の五分間」といふ標語は、誰もが周知の通り、どこまでも粘り強く、能く土俵際に踏みこたへるものが、勝ちを占める意味である。それゆゑ、陸戦では有らゆる艱苦に堪へ有らゆる犠牲を忍び、偏に當初の目的に向つて勇往邁進する方法の實施が、戦術の重要な部分をなしてゐることに不思議はない。しかし、この原則は海戦には穴勝ちびつたり當嵌つてゐるとはいひ得ない、少くとも艦隊戦闘に關する限りは、艦隊戦闘に於いて決勝的要素をなすものは、斷るまでもなくその主力艦の砲火戦である。主力艦の裝備する砲の射撃速度が非常な進歩を遂げた今日、その集中砲火の下に悪戦苦闘に堪へつつ、身方の擁護を待つて、最後の二瞬に頹勢を盛り返さうなどいふことは、たとひ有力

海戦に於ける
最初の五分間
が肝要である

なる援隊が時を移さず射界に入り來つたととしても、所詮望まらるべくもない。艦砲の威力は艦數又は砲數の自乗に比例するから、勝敗は實に分時にして決せらるべく、随つて、海戦に於いては最後の二瞬まで踏みこたへることよりも、寧ろ最初の一瞬の機會を掴むことがいかに大切であるか、蓋し意料の他である。そんなら、その最初の一瞬の機會を掴むにはどうすれば可いか。それは艦隊戦闘の鍵を開くべき喫緊の問題でなくてはならない。

艦隊戦闘 *Fleet action*. は艦隊といふ整然たる組織體と、組織體の間に於ける組織的破壊の實施である。それゆゑ、對抗兩體隊のいづれか一方が、二度と再び以前の序列を保つことを得ぬ程度の打撃を受けて、混亂の状態に陥れば勝敗は立どころに決する。さすれば、双方互に敵の弱點に乘じ、最大威力を集注し得らるべき壓倒的位置を占むめるやうに、戦術運動の巧妙さを悉くして、それぞれ身方に有利の戦略的對勢を維持することより、艦隊戦闘は先づ着手せられなければならない。この戦略的對勢は、凡そ二様の目的を有する

戦術運動によつて達成せらるべきである。言換へれば、相対抗する兩艦隊は
 一は身方の動靜を秘密にすることと、一は敵の配置を探知することの必要よ
 り、本隊の周圍に哨幕をさながら屏風のやうに、引廻はした戰陣陣形 *Formation*
Formation を作つて敵に接近してゆくことである。それに就いて英國の左る論
 者は次のやうな一案を提唱してゐる。主力艦隊を圓形の中心に集結せしめ、
 それより約三十哩半徑の外圍に裝甲巡洋艦と巡洋戰艦の牆壁を繞らし、更に
 四十哩を隔てて偵察戰隊の第二牆壁を、尙最後に又四十哩半徑の水雷戰隊の
 第三牆壁を設ける。さうしてこれら哨戒列の各艦は、その圍上を前後に運動
 しつつ、無線電信によつて互にその消息を通ずる。この全組織は先づ十哩の
 速力で、互に敵の方向に對して漸次に各外圍を擴大し、その第三外圍が相接
 觸するまで進航した後、機を見て裝甲巡洋艦又は巡洋戰艦を放せば、優に三
 重の牆壁を突破して、直ちに敵の主力艦隊に内薄することが出來よう。これ
 は米國のいはゆる環形の陣法である。その案の可否は暫らく預りとして、驅

屏風を引
 風はなし
 引はなし
 輪形
 形
 形
 形

逐隊輕巡洋艦八吋巡洋艦が二重三重の哨幕を張り、主力艦を眞唯中に取圍ん
 でその前後左右を護衛する上に、空には飛行機飛行船が鷲や鷹と飛交ふて警
 戒に怠りなく、廣表數十里の海面を壓して威容堂堂と進航する光景は、たと
 へば大鯨が幾百千とも數知れぬ鱗鱗の群れに案内せられてゆくやうなもの。か
 ういふ大艦隊が双方から打當つて、爰に天地もひつくり返へるやうな、大活
 劇を演じようといふのであるから、その壯觀は斯道の専門家でない限り、所
 詮これを想像することすら困難であらう。

甲乙兩艦隊が果していかなる陣形を作つて互に對峙するかは、結局その場
 合になつて見なければ、何んとも見當の付けようはないが、今假りに兩艦隊
 が相對して進航し、それぞれ哨幕を以つて本隊を蔽遮し、而かもいづれも特
 務艦隊を伴隨するものとすれば、その陣形は少くとも次の通りであらう、と
 いふくらはは想定し得られるかと思ふ。

本隊(主力艦隊)は戰艦巡洋戰艦を以つて編成し中央に位置する。

縦列(特務艦隊)は若干の距離を置いて本隊の後方または安全なる側面に續航する。

哨幕(偵察戦隊)は一等巡洋艦、輕巡洋艦及驅逐艦を以つて編成し、本隊の前方または敵に近き側面に展開して、恐らく本隊及縦列を健手に蔽遮する。さすれば、艦隊戦闘は第一期の前哨戦、第二期の主力戦、第三期の追撃戦、と大體前後三段に分けて差支なからう。尤も、それは説明の便宜上かうも分けて見たらといふだけのことであつて、別にさうした區切りが判然付いてゐるわけではない。追撃戦は左も右として、前哨戦と主力戦の時間の経過は、殆んど無いといつても可いくらゐなもので、前哨線の接觸は同時に主力間の決戦を誘發する。何故かなら、接觸するまでは擴大してゆく哨幕も、接觸するに伴れ漸次に減少せられて、緩急相應じ得べき位置を占めべきであり、而かもそれが双方から非常な快速さで、互に奮進しようといふものであるから、最前線の衝突が起つたかと思ふ間もなく、第二第三哨線の混戦となり、やが

て主力艦の射界に入つて、集中彈の交換を見るべきは疑ひないからである。双方の戦闘速力と、本隊と前哨の距離にも由りけりであるから一概にも言へぬが、今日の各艦種の速力と、戦闘艦の主砲の射程から考へて、この推測は決して無理ではなからう。そこで、艦隊戦闘は順序として前哨戦から説明すべきであるが、驅逐艦、輕巡洋艦、八吋巡洋艦又は巡洋戦艦などの對抗戦は、要するに主力戦を中心としてその前後に涉つて行はれるので、勢ひ重複の嫌ひを免かれぬから、爰には先づ艦隊戦闘の眼目たる、主力艦の砲火戦から説明することにした。

第一期の前哨戦に於いて、甲の艦隊が乙の砲火に壓倒せられて、多大の損害を招いた結果として、甲が不利の位置に陥る場合を想定すれば、主力艦が魚雷や爆彈の猛襲に悩まされることは、勢ひ當に然かるべきところであるが、しかし、砲火に傷くことは恐らく有り得ぬであらう。ところで、第二期の主力戦に入ると、この關係は全く顛倒して、空中及水中攻撃は二次的のもの

主力戦に於いては、勝つては、主力的に決する。砲火は、中

なり、砲火がこれに代つて決勝的要素を成すに至るのである。主力艦がいつでも多數の大口徑砲を集中装備し、その幾隻かを聯ねていはゆる戦列 *Line of battle* を形作ることは、誰もが知る通りである。さうして、集中砲火の威力によつて敵を殲滅するのがこの戦列の目的で、その目的は戦列の種種なる陣形運動によつて達成せられるのである。詰まるところ「敵を掴んでこれを撃つ」といふ、兵語の前段の「敵を掴む」ことが哨幕の任務であるとすれば、後段の「これを撃つ」ことは取りも直さず本隊の任務に他ならぬのであつて、その任務は要するに敵の急所に對して、能ふ丈け多數の集弾を命中せしめ得べき、身方に有利の陣形を取ることによりて遂行せられなければならない。この陣形運動 *Fleet manoeuvres* の要領は結局一に歸する。それは他でもない、互に戦列の急所を敵に向けぬやうにすること、敵の戦列の急所を身方に向けるやうにさすこと、この二つの目的を同時に達成するに在る。それはどうすれば可いか。戦列に於ける各艦の側方射撃に使用し得べき、砲数は必然的に首

戦列は横
陣を避け
て縦陣を
作るはな
らなく
ない。

尾射撃に使用し得べき砲數よりも多い道理であるから、各艦が互にその舷側を正横に見るやうに並列する横陣 *Line abreast* を以つてしては、常にその最極限の砲門を敵に向け得ぬばかりか、各艦互に他の射界を蔽遮する結果として、自隊の砲火を滅殺する惧れを免かれない。それゆゑ、最大多數の集弾威力を發揮する爲には、各艦は是非自他互に正縦に位置する必要から、戦列をして必然的に縦陣 *Line ahead* を成さしめることになる。即ち嚮導艦 *Guide ship* に倣つて各艦がその直後を續航する陣形を取ることである。この縦陣が二列三列をなすときは、自他互にその射界を蔽遮するばかりか、その運動の自由をも妨碍する結果となるから、戦列は勢ひ單縦陣 *Single line ahead* でなくてはならない。日本海海戦に於いて露國の東遣艦隊が概して二列縦陣の戦闘隊形を取つたことは、明かに惨敗の一因を成したものと認められる。

この縦陣の急所はいふまでもなくその首尾兩端に在る。さすれば、艦隊戦闘に於ける有らゆる陣形運動の要領は、結局いかにしてこの急所に向つて、

集弾砲火を傾注せしめる位置に立つを得べきかに歸着する、そこで、この問題に對しては、凡そ二つの有利なる陣形運動が提唱せられてゐる。一つは乙字戦法であり、一つは丁字戦法である。戦列の急所が首尾兩端に在りとするれば、その急所を前後より同時に抑制して、壓倒的打撃を加へるに如くはないが、急所のうちの急所はその首端に在るから、嚮導艦に對して集弾火力を傾注し得らるれば、先づ大成功といはなければならぬ。嚮導艦が一たび進退の自由を失へば、後續艦は是非これを避けなければならず、もし沈没したとすれば、これを目撃する僚艦の志氣に甚大の影響を及ぼすばかりでなく、互に衝突を防ぐ爲め、必らずやその針路を一變するの餘儀なきに至るであらう。さうして、その結果は忽ち全列を混亂に導いて、勢ひ砲火の衰退となり、遂に再び挽回し難き窮狀に陥らしめねば止むまい。前者は乙字戦法の要領であり、後者は丁字戦法の要領に他ならない。丁字戦法 T-shaped tactics は、畢竟一方の縦陣が丁字の水平畫に當る位置を占め、同時に他の一方の縦陣が、その

丁字戦法
とは何を
意味する
か。

垂直畫に當る位置に在る場合の謂ひである。この對勢に於いては、丁字を描き得た一方が、各艦の舷側砲火を他の一方の首翼に雨下し得る反對に、丁字を描かれた一方は、正首に旋回し得べき嚮導艦の前部諸砲のみを使用し得るに止まり、後續諸艦はたとひ射程内に在つても、前航艦にその砲火を蔽遮せられる結果となり、延ひて丁字を描かれた縦陣が致命的打撃を受けることは争へない。言換へれば、身方の縦陣の側面を敵の首翼に對し得べき丁字戦法によるときは、身方の全列の砲火は敵の翼艦二三に集中せらるるに引換へ、敵の應射は最大限度その二三翼艦の艦首砲若しくは艦尾砲に過ぎぬから、一翼のみを以つて敵に對する縦陣は、隣り間にその翼艦の一二を失ふを免かれ得ぬであらう。丁字戦法は凡そ右の通り有利であるので、甲乙兩艦隊が互にこれを描かうとする、と共に敵をして描かせまいとするのは當然の事柄である。そこで、双方の總帥の伎倆に大した相違がないと前提すれば、接觸の當初に於ける彼我縦陣の對勢は、自然略齊頭の並航戦となるのが普通である。

随つて、濃霧の晴間とか煤煙幕の遮蔽裡とかいふ或る特別の場合か、左もな
くば敵の過誤に由る場合でない限り、さう滅太と註文に嵌つた丁字戦法を取
り得られようとも思へぬが、いづれか一方が他の一方の先頭を壓して進出し、
これに對して有利なる内線操縦に轉じ得ぬ場合は、矢張り一方をして丁字戦
法の利を逞しうせしめることにならう。齊頭並航戦に於ける對抗艦列はその
全側砲火を敵に雨下し得るのであるから、機會は正しく均等に惠まらるべき道
理である。しかし、かかる並航戦がさういつまで繼續するものではない。何
故かなら、双方の速力が全然同一の場合は有り得ぬことで、いづれか一方の
速力が多少でも優れてゐればその戦列は漸次齊頭の位置より進出して他の一
方の針路を擁塞し、到底並航の對勢を維持することを容さぬやうになるから
である。この場合に於いて、劣速艦隊が不利なる丁字の對勢に陥らぬやうに
するには、優速なる敵の艦隊を絶えずその正横に見るやうに、連續して内側
に向ひ回頭運動 *Turning movement* を行はなくてはなるまい。即ち對抗兩陣は

劣速艦隊の取るべき内線操縦の對勢は、優速艦隊の取るべき外線操縦の對勢である。

内外大小の同心圓形を描いて、一はその小圓形上を、また一はその大圓形上
を周航することとなるのであつて、劣速艦隊がかかる際に處して取り得べき、
唯一無二の辨法はこれを措いて他に求むべくもない。いはゆる内線操縦 *Inner line tactics*
とはこれを指すのである。内線操縦は劣勢艦隊として別に取るべ
き臨機の處置がないから、己むを得ぬとはいへ、それは辛うじて窮地を脱出
し得る程度に過ぎぬのであつて、その不利なる對勢を好轉せしむべき公算を
缺ぐ點に於いて、依然として何等變つたこととはないと斷ぜなければならぬ。
優速艦隊との齊頭並航若しくはこれに近い對勢を、維持せんが爲に行はるべ
き内線操縦は、時として急回轉且又大回轉を餘儀なくせられる結果、戦列に
著しい屈折を生じ、延ひて射撃の精度と速度共に減退を見るべきは勢ひ避け
難い。これに反して、敵は得たり賢しと機を逸せず、その屈折點目覓けて益
盛んに猛火を雨下するであらうから、いかなる努力もさうなつては絶望の他
なく、到底その類勢を翻へす由もないであらう。主力艦隊の決勝戦闘に於い

て敵に對して丁字を描き、又は敵をして大回轉をなさしめることが、いかばかり有利であるかに就いては、最早これ以上の説明を加へる必要はあるまい。しかし、これを敢行するに當つて、幸ひ優速といふ條件を恵まれてゐれば格別、さもない限り結局五分五分の勝負に終つて、双方共に傷くのは知れたことである。そこで、主戦列の同航戦に於いては、双方が相打ちを引當てにせぬ以上、勢ひ巡洋戦艦の助攻を借るか、水雷戦隊の活動に由るかして、是非共敵を大屈折の止むなきに出でしむべく、仕向けることが想定せられなければならぬ。

巡洋戦艦は、その裝備する砲類の口径また門數に於いて、戦艦のそれと同様であつて、而かもその快速は優に戦艦を凌駕してゐるから、敵と接觸してその挑戦に應酬するにも、また隔離してこれを回避するにも、兩つながら自由自在であつて、その長所を發揮して敵の先頭又は後尾を脅威するには、至極詭向きの逸物といふべきである。ところで、流星に英獨の先進海軍も、

大戦以前まではこれを艦隊の基幹として、戦艦と同列に置くほどに重用せず、寧ろこれを快翼 *torpedo* の名の下に戦艦の耳目たらしめ、その攻撃力と快速力を以つて、敵の手足たる偵察艦獨得の行動を擁塞するを主務とし、兼ねて遁走艦の追撃敗殘艦の撃破を副務とするものと認めて、艦隊が堂堂と雌雄を決する場合の活動を度外視してゐたやうである。米國海軍も亦勿論同様である。ひとり日露兩國は實戦の教訓に鑑み、形式は齊しく快翼ながら一隊を編成して、戦艦と共にこれを主力の決戦に使用する先例を開いた。八月十日の旅順沖の海戦及日本海海戦に於いてわが東郷艦隊は、いはゆる乙字戦法のいかに合理的なるかを模範的に示めた。爾來、兩國は艦隊の首尾に高速力を有し、且攻撃力に富む一隊を備ふる必要を看取し、爰に期せずして八八又は八四編制を採用して、巡洋戦艦の位置を重視するに至つたことである。乙字戦法とは、要するに攻撃艦隊を主攻と助攻の二手に分け、主攻の一手は敵の廣側面に、又助攻の一手はその狭側面に當り、双方の協同運動によつてそ

は八八艦隊
乙字戦法を
前提として
編成した
理想的な
戦術である。

の集弾火力を敵の一部分に雨下し、かくして壓倒的勝利を制せんとする戦法に他ならない。即ち主戦列の並航戦に於いて、主攻列と助攻列はそれぞれ敵の先頭を攻撃中心とし、戦闘距離を半径として描く圆周上の切線たるべき位置を占め、攻撃中心より双方の列頭に引く直線が正三角形を形作るやうに、助攻列は絶えず敵の先頭を壓迫して、主攻列との相対的位置を維持し、敵が双方の列間に突入するを防ぎつつ、これに對して最大火力の狭撃を加へるのが、この戦法の要領である。俗に言ふ八八艦隊とか、八四艦隊とかの艦隊編制は、畢竟この乙字戦法を前提とした、理想的の編成方式である。これを詳説すれば、八八艦隊は、戦艦八隻を以つて編成する主攻列を中央に、巡洋戦艦四隻を以つて編成する助攻列を快翼としてその前後に配することにより、乙字戦法を實施せんとする編成方式であつて、八四艦隊はその助攻列を巡洋戦艦四隻一隊の前艦のみに止めて、後翼を缺ぐ場合の編成方式である。前者によるときは、たとひ戦艦隊二單位を敵に引受けても、前翼は絶えず取り

艦の進路を抑壓し、後翼は敵の艦隊の回頭に備へる、と同時にその輕艦隊を脅かしつつ、更に後方の戦艦に對抗する重任を果し得るのであり、後者を以つて敵の戦艦隊二單位に當るには、わが主攻列は毎に敵の先頭第一次の單位に並航し、その後續第二次單位を列外に立たしめる方法を探り、わが前翼の助攻列を以つて一意専念敵の先頭單位の進路を斜に遮斷し、敵の八隻をわが十二隻で挾撃するのである。言換へれば、敵の後續單位より離れながらその先頭單位に全力を傾倒し、敵の他の一單位を宛ながら有れども無きに等しからしめるもので、この戦法の可能性は、一に巡洋戦艦の活動に待たなければならぬ。もし左もなくて前翼が先航抑頭の機を失へば、勢ひ全戦列の並航砲戦となり、優劣の位置忽ち顛倒して、敵の戦艦隊をして自由にその威力を發揮するに至らしめ、

敵艦隊	十六隻	十五吋砲	百六十門
我艦隊	十二隻	十五吋砲	百十二門

の對抗となり、フェイス提督の *N* 自乗法則 *Fisher's Square Law*. により、必勝の公算十の八九を逸し去るべきことは疑ひない。尤もこの戦法が果して有利であるとすれば、敵も勿論同様の戦法を以つて對抗するであらうから、結局双方の混戦となるに相違なく、必らずしも机上の論策によつて輕輕しく推斷すべき限りでないとはいへ、かかる混戦に際して速かに戦線を整頓し、身方に有利の對勢を齎らすにも、艦隊の快翼たる助攻列の、敏捷なる運動が絶対に緊要であつて、十全の戦勝はこれを除外しては、到底期待し得られぬのである。

洋の東西を問はず、時の古今に論なく、少しく目立つ事柄は、何んでも彼んでも、英雄豪傑の功績に仕て了はねば氣が濟まぬのが人情と見えて、英國ではネルソン時代に百門砲の戦列艦 *Ship of the line*. と五十門砲のフライゲート *Frigate*. の中間に、いはゆる七十二門艦 *Ship of seventy two guns*. を設け、これを風上の有利の位置に備へた陣形は、明かに今日の戦法の濫觴であるといつてゐる

やうである。しかし、古いことをいへば、わが邦の海賊は源平時代から關船を利用して、敵の兵船の出足を押へる骨子を會得してゐたのであるから、英國などとは天から較べ物にならぬのである。壇の浦の合戦は、確かにツラフアルガの海戦よりも古い、と記憶してゐる。撓漕兵船や、撓帆併用兵船や、帆走戦列艦の時代の事は議論にならぬとして、近世に至つて、快速艦の一隊を主力の決戦に備へる、必要を認めるやうになつたのは日清戦役當時からのことで、黄海海戦に於けるわが坪井艦隊の遊撃隊は、取りも直さず叙上の助攻列に當るものと思はれる。それは左に右双方の齊頭並航戦にしても、丁字戦法若しくは乙字戦法のいづれにしても、敵の先頭を切つてその回頭を餘儀なくせしめることが、絶対條件である點に變りはない。随つて問題は結局速力の優劣に歸着する道理であるが、これが解答としては、略敵に對する四分の一乃至五分の一の優速を要求する、といふに一致してゐるやうである、即ち敵の艦隊速力が二十節とすれば身方は二十四五節、二十一節とすれば略二

十六節といふ割合である。序ながら日本海の海戦に於ける、彼我艦隊の速力は三と五の比率であつたと傳へられてゐる。

巡洋戦艦の高速翼が、敵の主戦列の先頭を擁塞し、若しくはその退路を遮断して、大回轉又は他の運動をなすの止むなきに至らしめ得るやうに、輕快艦の水雷攻撃も亦同一の目的に利用せられる。例へば、驅逐艦隊及潜水艦隊が主力の運動と策應して敵の先頭に襲進し、その翼艦目覓けて魚雷を發射するか、但しはその航路に機雷を散布するか、二途そのいづれかに出づるときは、その効果は恐らく巡洋戦艦の活動と大差ないであらう。今假りに魚雷の有効距離を一萬二千米とし、敵がその發射の方向に駛走するものとすれば、二萬米即ち十哩内外の遠距離より發射したとしても、その魚雷は有効と見て可い。今日の海戦に於いては、驅逐艦と潜水艦の有効の程度は、巡洋戦艦、八吋巡洋艦及巡洋艦と異なるところはない。今日の艦隊戦闘は、單に戦艦列の砲火戦によつてのみ勝敗が決められるのではなく、實に戦艦列を基準とする

水雷戦隊の奇襲も乙字戦法の同様の俤功がある

る、有らゆる補助艦艇の協同動作によるものに他ならない。それゆゑ、敵の前翼に致命的打撃を與へることが、いかほど緊切であるにもせよ、主戦列の全砲火並に補助艦艇の水雷攻撃を、悉く敵の縦陣の先頭に集中せなければならぬ、といふやうな極端な主張に捉はれてはならない。叙上は、要するに、攻撃の重心をいづれに置くべきかに就いて、専ら説明したに過ぎぬのであつて、一方射撃の甲乙なき分配 Judicious distribution of firing. といふことも、考慮のうちに加へなくてはならぬのである。艦砲射撃には集約と疎放の二通りある、疎放は各艦に平等の砲火を浴びせること、集約は限定せられた數艦に集彈すること、どちらが有効であるかは見解の岐かれるところである。ただ、しかし、何事によらず餘り極端に走るのは考へ物であるから、問題の契點は恐らく二つの要求を同時に充たすに在るであらう。そこで、結局敵の二三翼艦を目標とする、と共にその後續各艦をも全然除外することなく、砲火を注ぐ必要があるといふに歸着する。水雷攻撃の場合も亦素より同断であらねばな

らない。

驅逐艦が主力に伴隨して、決戦に参加するやうになつたのは一九〇六年このかたのことで、日本海の家戦はその初舞臺であつた。その時代から、驅逐艦は水雷戦隊を編成し、敵の主力に對して奇襲を敢行し、又は敵の奇襲に對し、主力を警戒する任務に服するやうになつたのである。驅逐艦の奇襲に逢へば、戦艦はこれに脅かされて専心決戦に従ふを得ぬから、自然身方の驅逐艦や輕巡洋艦の擁護により、これを撃攘せなくてはならぬことになつて、爰に次ぎの數段に涉る分派戦を見るに至るであらう。

一、主力艦隊との間に行はるべき砲火戦と水雷戦

一、偵察戦隊の分派戦

一、彼我水雷戦隊の間に起るべき接戦

前にも述べた通り、主戦列の並航戦に當り、敵の前翼を壓迫して回頭を餘儀なくせしめるには、双方の速力に甲乙なき限り、乙字戦法によるか、それ

ともまた水雷戦隊の奇襲によるかの二つ一つより途はない。水雷戦隊の奇襲は驅逐艦が主戦列の前程に塞がり、その進路に魚雷を放つて遂巡せしめ、たとひ幾分なりとも、身方の本隊に先航の利を占めさす手段であつて、假りにこれを驅逐艦の進路擁塞と名ける。その際、敵はその跳梁を黙過する道理はなく、主力艦自ちその六吋副砲の連發により、且また輕快艦の擁護に須つて、これを撃退せうとするであらうし、身方は身方で偵察戦隊や巡洋戦隊を繰出して、その援助の下にどこまでも襲撃を遂行せうとするであらうし、旁以つて彼我の間に極めて複雑而かも壯烈な混戦が起らうといふものである。次に數ふべきは驅逐艦の消極的抑壓ともいふべきもので、主方艦隊の退却に當り敵の追撃を阻止する任務である。ドガーバンクの家戦に、獨逸のサイドリツツ以下の巡洋戦隊が、英國のタイガー以下の優勢の巡洋戦隊に遭遇し、二萬米の距離を置いて交戦しながら本國に向け遁走を企てたとき、英艦が次第に肉薄して一萬米に近づき、ブリュートヘルが遂に落伍し、大勢は漸く獨逸側に

舷舷相摩
の壯烈な
の接戦は
るの戦は
今にもの
戦にもの
はれにる
る。行

非なるものがあつた。と思ふと、一隊の驅逐艦が忽ち敵の進路に現はれ、疾駛し來たるライオン、タイガー、ニューヂーランドの堅壘に對して熾んに脅威を加へ、辛うじて身方の退却を完うせしめたのであつた。勿論英國の水雷戦隊もそれを妨害せうとして、双方の間に水雷戦を交へるに至つたが、兎にも角にも、獨逸の驅逐艦の活動が相當の効果を收め得たことは争へない。三はいはゆる舷舷相摩の警句により、世間周知の水雷戦隊接戦の場合であつて、驅逐艦の眞面目は爰に始めて遺憾なく發揮せられて躍如たるものがある。魚雷射程の増進に伴れ、戦闘距離が擴大せられることは疑ひないが、さうかといつて、舷舷相摩の壯烈なる接戦が、急に見られなくなるやうなことは恐らく有るまい。現に大正三年の夏も終りに近きころ、ヘリゴランド沖に起つた英獨巡洋戦隊の遭遇戦に、英のラーテス以下十數隻の驅逐隊が、獨の水雷戦隊と僅か數米突の近距離で接戦した實例がある。それは將來とも間間起り得べき事柄であることを最も雄辯に物語るものである。

驅逐艦の任務はひとり叙上に止まらず、決戦後の跡始末はこれを一手に引受けてゐるやうに思はれる。その第一は驅逐艦が疾駛して、遁走する敵艦の前路を擁塞し、その回轉の自由を奪ひ、或は右より壓迫し、或は左より威嚇して敵を翻弄し、その直航を不能ならしめて、遂にこれを屠り去ることである。その第二は敵の巨艦が撞折れ體傾きて洋上に漂ふとき、これが處分に當ることである。その第三は同じく敵の敗殘艦を遠巻きにしてこれを監視し、普通日没を待つて肉薄撃沈することである。大海戦の直後に水雷夜襲戦が起るは、畢竟これが爲である。驅逐艦の本來の面目が夜襲に在ることはいふまでもなからう。しかし、敵とて主力の周圍には哨幕を幾重にも張廻はして警戒を抜からう筈もないから、無闇と近寄れば忽ちその發見するところとなつて、容易に襲撃の機會はなからう。といつて、拂曉前海面が暫らく暗黒に變はる比ひは、人間の注意力が最も薄弱となる時であるから、鳥渡考へると襲撃の好機會であるやうにも思はれるが、さういふ時こそ、却つて敵はその

警戒を嚴重にするに相違ないから、一層困難な道理である。水雷襲撃はいはゆる接近戦術 *Tactics of approach* である。敵艦に接近し得れば、これを葬り去つたも同様であつて、その事の成る成らぬは、偏に接近し得るか得ぬかで極まる。そこで、水雷戦術の要領は、詰まるところ、どうして敵の哨幕を破るか、に歸するのであるが、遺憾ながら別にこれぞといふ原則も見當らぬやうであるから、爰にはただ駆逐艦の襲撃は暗夜を擇ぶか、左もなくば煤烟幕を利用するか、他の他はなく、いづれにしてもその指揮官の機智と、沈着と、大膽に須つて、始めてその成功を望み得られることを一言するに止めておく。

近來科學の進歩と、共に水雷攻撃に對する防禦方法にも、照明及監視器の改良、警戒艦艇の増加、防禦網の堅牢、艦底の強度、港灣の防備などに至るまで長足の進歩を來たしたので、駆逐艦の奇襲の困難は従前とは丸切り比較にならぬ。殊に艦艇の速力の増進はその不可抗の障礙であるとも見られよう。タービン機關の採用はその原因である。二昔前は駆逐艦三十二節に對する、戦艦

十八節^{ノット}くらの平均比率であつたが、今日では駆逐艦の三十五節^{ノット}に對する、戦艦の二十三節^{ノット}乃二十五節^{ノット}、巡洋艦に在つては實に三十三節^{ノット}以上に達する勢ひで、駆逐艦も餘り威張れぬやうになつた。それであるから、前に述べた追越して進路を塞ぐ法などは、新銳の戦艦に對しては先づ絶望といつても可いからぬなもの。双方の速力が増進したのであるから別段仔細はなからう、と思ふものがあらうも知れぬが、それは攻撃の方面からばかり打算した議論であつて、海戦の真相を辨ぜぬものの誤解に過ぎない。いかにも水雷戦隊の速力が三割増しとなり、主力艦隊の速力も三割増しとなれば、兩者の對勢關係は従前と同様である、といふ相對速力説 *Rule of the relative speed* も一應は成立たぬことはない。しかし、熱く考へて見ると、駆逐艦の襲撃は敵艦の背後から行ふのではなくて、擦違ふ途端に魚雷を發射せうといふのであるから、目標は双方の速力の和だけ移動する勘定であつて、詰まり三割と三割を合せて六割だけ、襲撃の餘裕を失ふ結果となるのである。双方が非常の高速で擦違

煤煙幕の
展張に好
適なる艦
も好適す

ふ、利那のほん僅かの隙を狙はうとするのであるから、その間眞に髪を容れない。而かも一たび好機を外らせば、双方遠く隔つて二度の隙を狙はうにも、敵は警戒を新たにしてお容易にその術に乗らぬであらう。ただ、しかし、そこへ持つて来てちやうど詭向きに、煤煙幕 *Smoke screen* といふ新工夫が案出せられたので、白晝の水雷襲撃にも一段の強味を添へることになつたのは何よりである。

射撃の目的が煤煙に蔽はれて敵の視界を遮るとき、その砲火の威力を無効ならしめることはいふまでもあるまい。さうした煤煙幕の展張に最も好適の艦種は、重油燃焼による高速艦に他ならない。駆逐艦が隨時隨處に煤煙幕を展張する段には、その機能は眞に恐るべきものとなつて、嘗にその本隊を危地より救ひ得るばかりでなく、敗形を轉じて勝利の因と成すことも望み得られるのである。主攻列の並航砲戦に於ける、助攻列の狭撃運動に都合が好いのは勿論のこと、一方の艦隊が對勢不利の場合、適當の位置に煤煙幕を生ぜ

今後は海
空機の航
空任務の
種なるの
任務が重
要なるを
占める

しめ、その蔽遮裡に暫らく敵鋒を避けつつ、機を見てその蔽遮裡より奇襲部隊を放ち、突如敵の不意を衝くにも洵に都合が好い、といはなければならぬ。潜水艦を伴隨する奇襲部隊は、劣勢海軍國の唯一無二の頼みともいふべきものであるから、有らぬ場合と機會に於いて、これを活用することを怠つてはならぬのである。

叙上は今日の艦隊戦闘がひとり戦艦のみならず、巡洋戦艦・巡洋艦・驅逐艦・潜水艦などいふ、あらゆる水上及水中艦艇の協同運動によつて行はれることを物語るのであるが、これ以外に尙必要缺くを得ぬ、戦術單位があることを立等閑にしてはならない。それは他でもない、航空機である。最近に於ける立體戦術 *Cubical tactics* の發達は、實に有らぬ海上作戦を通じて、重大なる任務を負担せしめるに至つた。海上よりする航空機の大規模の入寇は、航空母艦によらぬ限りこれを敵地に實施するを得ぬから、その海上に於ける覇權の制扼を前提とするが、巡洋戦艦・八吋巡洋艦・輕巡洋艦・潜水艦などの入寇に際して、